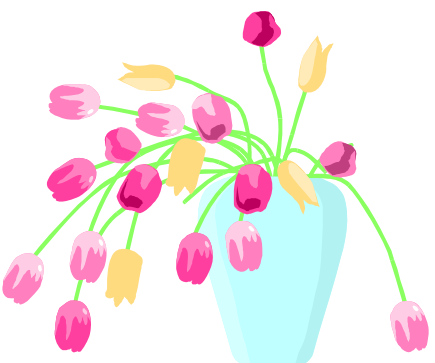


第四十四回

静岡県教職員芸術祭

文艺優秀作品集



主催

静岡県教職員組合

公立学校共済組合静岡支部

一般財団法人静岡県教職員互助組合

静岡県教職員生活協同組合

静岡県学校生活協同組合連合会

一般社団法人静岡県出版文化会

公益財団法人日本教育公務員弘済会静岡支部

株式会社静岡教育出版社

国際観光株式会社

静岡県住宅建設工業株式会社

静岡県教育委員会

静岡県校長会

静岡県高等学校長協会

静岡新聞社・静岡放送

中日新聞東海本社

後援

第四十四回静岡県教職員芸術祭 文芸優秀作品集

目次

小説

優秀賞 黒楽茶碗

大重 晴美 浜松市立佐藤小学校

詩

優秀賞 理由
佳作 雷雨の夜

小松 忠 退職互助部(小笠)
袴田 稔子 退職互助部(志太)

童話・童謡

優秀賞 親子クジラの旅
佳作 昆虫会議
佳作 「鈍亀(どんがめ) 街道」
佳作 小さな菊

坂部 哲之 退職互助部(磐周)
中村 肇 退職互助部(榛原)
渡辺 忠栄 退職互助部(沼津)
長崎 良夫
東部特別支援学校伊豆高原分校

評論・書評

優秀賞 筆致は平明・優しい語り口調

佐吉の幼・少年期に恣意からの創作の筆跡

佳作 政治家の言葉

高柳 幸夫 退職互助部(湖西)
竹本 公一 退職互助部(駿東)

随想

優秀賞 「ふるさとの声」
佳作 放火殺人事件と「編集手帳」
佳作 眩暈

松田 宏 退職互助部(志太)
竹本 公一 退職互助部(駿東)
小松 忠 退職互助部(小笠)

短歌

俳句

選評

「吾助さん」

障子越しに、吾助を呼ぶ女の声がある。

「吾助さん、旦那様がお呼びです」

この時、吾助は半ば夢うつつであつた。彼は、自分に与えられた三畳ばかりの狭い部屋の中で、仕事をさぼって居眠りをしていたのである。

自分を呼ぶ声が女中のお幸のものであることに気付いた吾助は、その声の中に、いつもとは違った気配を感じた。彼は、慌ただしく畳から起き上がった。

障子を開けると、お幸が青い顔をして吾助を見上げていた。

「旦那様が、お急ぎのご様子で」

吾助は、お幸の言葉に頷くと、主人の部屋に向つてあたふたと歩き出した。

主人の吉兵衛から座敷に呼ばれることなどこれまでになかつたことである。唐突とも思われる出来事に、彼は表情を硬くした。

吾助は六十近いというのに、番頭はおるか手代にもなれず、店での扱ひも仕事も下男と変わりはない。自分の存在が影のようであることを彼も十分知っていた。だから、もしかしたら、吉兵衛の口から暇を言い渡されるのではないかと、怖じけづいたのである。

店は、老舗の呉服屋である。吉兵衛は、役に立たないと判断した者は容赦なくやめさせてきた。

それなのに、ほとんど役に立たない吾助が住み込みの使用人として長年勤めることができたのは、今から五年前に亡くなつた先代との約束があつたからに他ならない。

「吾助は、わしの幼なじみだ。大切にしろとは言わない。だが、奴がこの店を出るといふまでは、どうか置いてやっておくれ」

主人の吉兵衛が、吾助を追い出さなければかりか、狭いながらも部屋まで与えたのは、こうした先代の言葉があつたからである。

臨終のきわに、吾助の処遇に先代が思いを寄せてくれたのは、彼にとつては実に運の良い出来事だつた。なぜなら、店を追い出されてしまえば、老いた吾助に行き場はなかつたから。

それでは、その先代に恩義を感じて、吾助が真実懸命に働いたかという点、実は、そうではないのである。

先代が亡くなつたころから、吾助は自分の体に急速な衰えを感じるようになっていた。膝や腰が我慢できないほど痛むことも度々であり、無理がきかなくなつていたのである。

吾助は、用事を頼まれた時以外は、ほとんど自分から仕事を求めることはしなくなつた。いやそればかりか、主人の目を盗んで昼間から部屋に籠り、仕事をさぼって体を休めていることも多かつたのである。

主人は、口には出さないが、自分のこれまでの怠慢を知っているのではないだろうか。そして、いよいよ辛抱の限度がきたのだろうか。吾助はそんなことを考え、背中に冷や汗が流れるのを感じた。

いつの間にか主人の部屋の前に立っていた。彼は慌てて、部屋の前で跪いた。そして、中にある吉兵衛に、臆したように呼びかけた。

「旦那様、吾助でございます」

すると、部屋の中で人の動く気配がし、吉兵衛の野太い声が聞こえてきた。

「入りなさい」

吾助は、言われるままに部屋に入った。そして、恐る恐る主人の方に顔を上げた。

ところが、不思議なことに、吉兵衛は彼に向かって笑顔を見せていたのである。

「悪いが、お前に、ちよつと頼みたいことがあつてね」

思いもしない事態に、吾助は狼狽した。吾助には、吉兵衛の気持ちを図ることができなかつた。人に頼られることなど、もう何年もなかつたことであり、主人からこういふ言われ方をされたのも初めてである。

「ところで、この頃足の具合はいいのか」

吉兵衛は、わざと話をそらすような感じで、吾助にこう訊ねた。妙に優しい主人の言葉が、吾助にはかえって不気味に感じられた。そして、そのため彼の気持ちはさらに萎縮した。

「へえ、大分ようございます」

すると、吉兵衛は、照れたような笑いを口元に浮かべながら、急に声を潜めた。

「実は、内緒でやってほしいことがある」

「へえ」

「お高のやつに知られたら、厄介なことになるのでね」

「お内儀様に、でございますか」

「そうだ」

吾助の脳裏に、内儀の姿が浮かんだ。お高は、店の中ではあくまでも楚々と振る舞っている。しかし、それが彼女の唯一の欠点と言えたが、子供のないせいもあるのか、夫の吉兵衛にはなにかとうるさく世話を焼くのであった。

美醜を問われたら、お高はもちろん美人の部類に入ることになる。けれど、夫婦の間に何かとあつて時々見せることになる、物に憑かれたようなお高の目つきには、尋常でないものがあつた。傍で見ていてもぞっとするような迫力があつた。

吉兵衛は、声を潜めたまま、話を続けた。

「以前から欲しかった茶碗が、運よく手に入るようになったのだ」

「へえ」

「前々から芳林寺の和尚にお願いしてあつたのだが、ようやく手放す気になつたらしい。これが、実にいい茶碗でね」

吾助の面に、驚きの表情が浮かんだ。いつの間にか、吉兵衛の話は考えもしなかつた方向に向かつていた。

「お高は、私の趣味に、決していい顔をしてくれない。どんなに魅力的な壺であろうと、目を見張るような書画であろうと、くだらない道具に見えるらしい」

ここで、吉兵衛は大きく一つ嘆息した。

「物の良さなどというものには、無頓着な女なのだ」

この時、吾助は、自分の顔が不遜にも主人の前で緩んでくるのを意識した。主人が自分をわざわざ呼び付けた理由が、わかつたような気がしたのだ。すると、今の今まで不安に苛まれていた自分が、急に滑稽に思われてきた。

吉兵衛は、傍らに置いてあつた小箱に手を伸ばした。蓋を開けると、中から小判を二枚取り出した。そして、それを吾助の前に差し出して言った。

「ここに二両ある。これで、芳林寺の和尚から茶碗を買ってきてもらいたい」

吾助は、無言で領いた。それから、それを両手に包み込むようにして受け取った。生まれてこのかた、小判など一度も目にしたことはなかつた。貨幣は金色に輝いて見え、彼はその光にすっかり魅了されていた。

吾助は自分が依頼されている仕事の大きさに、はっと気付いた。すると、瘡にかかつたように、急に全身に震えがきた。

それから、吉兵衛は改まったように、巾着から小錢を二、三枚取り出した。

「これで、道中、団子でも食べておくれ。二両は取られないように、着物の襟にでもしつかりと縫い込んでおくといい」

吾助は、主人の言葉に再び領いた。

「明日、五つになったら、店の裏から出て行くように。もう明るくなっているが、お高は店の用意で、お前のことには気付かないだろうから」

翌朝、吾助は、鶏が鳴き出す前に既に目を覚ましていた。前の日は、興奮していつまでも眠ることができなかったというのに。

主人が大切な仕事を託してくれたことに、嬉しさがないと云えば嘘になる。初めて人に認められたようで、どこかに誇らしさもある。けれども、彼の今の気持ちを問題にするならば、不安や緊張の方が、喜びよりも遙かに大きかつたのだ。

やめられるものならばやめたい。このまま店から逃げ出すことができたなら、どんなに幸せだろうか。吾助は深いため息をついた。

その時、ふいに障子越しに「吾助さん」と、自分を呼ぶ小さな声が聞こえてきた。

主人に言いつかったのか、開店前の慌しい最中、お幸がにぎり飯の包みを持って吾助の部屋にやってきたのである。その包みを手渡す時、お幸は、不安げに吾助を見た。

「吾助さん、夕方には戻るのでしょうか」

「そうするつもりだよ」

にぎり飯の包みと、着替えの着物を入れた風呂敷を片手に持ち、吾助はゆつくりと立ち上がった。膝の痛みも腰の痛みもここ数日は感じなかった。

内儀は、今ごろ主人にお茶を用意しているところである。彼女は、吾助が主人の使いで芳林寺に出掛けるなど、夢にも考えていないだろう。そのことを想像すると、自分がなにか大きな間違いをしかしているのではないかと、吾助は後ろめたい気持ちに駆られた。

内儀に見つかからないように気を配りながら、二人は裏口に回った。

「お幸、すまなかったね」

吾助は、にぎり飯の礼を言った。彼女は軽く頷き、そのまま無言で吾助を見送った。

次第に人通りが増えてきた街道を、ゆつくりした足取りで、吾助は歩いていった。初秋とはいえ、日差しはまだ強く、脚絆をつけた足にじきに汗が滲み始めた。

吾助の歩く横を、荷を背負って急ぐ町人や、荷車に野菜を載せて歩く百姓たちが、幾人ともなく通り過ぎた。年老いた吾助は、その度に彼らに危うくぶつかりそうになったが、かろうじてそれを避けることができた。

芳林寺は、吉兵衛の店から四里離れたところにある。決して大きな寺ではないが、吉兵衛には菩提寺であり、先祖代々の墓もそこにあつた。吾助も主人に連れられて、二、三度先代の墓参りをしたことがある。

だから、芳林寺までの道を知らないわけではない。迷う心配はなかった。だが、六十間近の吾助にとつては、その距離が問題だった。

「休みながら、行けばいいのだ」

吾助は、自分に言い聞かせるように、そう呟いた。

「そうだ、途中で茶屋に寄ろう」

そう思うことで、吾助は、沈みそうになる自分の気持ちを奮い立たせようとした。頻繁に外出するわけではないのはつきりとしたことは分らないが、主人の渡してくれたお金で、団子五、六本は食べられるはずだと思つた。

けれど、本当のことを言うと、団子のことを考える余裕はなかった。吾助は、あることをずっと気に病んでいたのである。彼の首の皮膚に固く当たるものがある。吾助は、主人の言うように、二枚の小判を襟に縫い込んでいた。それが、どうにも気になって仕方ないのである。

足袋を繕うと嘘をついて、お幸から裁縫道具を借りたが、目の悪い吾助には、作業を終えるまでにかかりの時間がかかってしまった。だから、二枚の小判を襟の中に縫い込むことができた時、彼は心から安堵した。難儀な思いはしたが、まず一つ事を終えた満足感すらあつた。

ところが、今度は、その襟の中の小判が彼の首をつつき、彼を苛立たせるのである。二枚の小判が、まるで自分の存在を誇示するように彼の首を苛んでいた。

と、その時である。

「じいさん」

傍らから、男の声が聞こえてきた。吾助は、その声に思わず飛び上がりそうになった。

「さつきから首を押さえて喰っているけど、いったいどうしたんだ」

遊び人風の若い男だった。彼は、吾助の様子を気にして、声をかけてきたようだった。

「いや、なんでもない。大丈夫です」

正直に話すわけにもいかず、吾助にはそう答えるのが精一杯だった。

「なら、いいが」

そう言いながら、自分の側から若者が離れていった時、吾助はほっとため息をついた。だが、緊張が緩んでも、心臓は尚激しく動くのが分かった。

いつの間にか、四つ半を過ぎていた。吾助の足は、既に三里の距離を歩いていた。家並みは途切れ、道の両側には田圃が広がっていた。風が渡ると、稲穂が波のように揺れるのが見えた。景色はすっかり変わっていた。

額から流れてきた汗が、菅笠の紐を濡らした。足は重い、痛みはまだない。これなら芳林寺まで無事に辿りつけるだろう。

吾助は、菅笠を脱ぐと、道端の柳の影に腰を下ろした。そして、風呂敷を開いて、中からにぎり飯の包みを取り出した。

昨日からのことが、遠いことのように思われた。いつもなら体の悪いことをいいわけにして、今頃は部屋に籠って、午睡を貪っている時分だった。

その自分が、主人の頼みで、茶碗を買いに芳林寺に行くことになった。できることなら逃げ出したかったが、主人の頼みを果たせずに帰ったら、暇を出されるに違いない。

そこまで考えた時、吾助は、思い出したように、慌てて襟に手をやった。そして、縫い込んだ小判がそこにあることを確かめた。平たく固いものが二枚、手に触った時、彼はやっと安堵することができた。

吾助は、にぎり飯を口に運び、ゆっくりと呑み込んだ。無事ここまで来たことを感謝しながら。

それまで平坦だった道が上り坂に変わる場所に、茶屋があった。吾助は、茶屋の長椅子に腰を下ろして、菅笠の紐を解いた。

「まだ、暑うございますね」

そう言いながら、娘は、持ってきたお茶と団子の皿を吾助の前に置いた。

「この先が、芳林寺だね」

「ええ。お寺に何か御用ですか」

「ああ」

吾助は、娘の問いに曖昧に答えた。

そして、団子を一つ摘むと、大きな口を開けてそれを頬張った。彼は、楽しむように時間をかけて、それを咀嚼した。褒美にしては安すぎるかもしれないが、吾助はそれで十分満足できた。

ところが、団子を食べ終わった時分である。吾助は、背後に人の気配を感じた。

「じいさん」

聞き覚えのある声だった。吾助が驚いて振り返ると、さきほど声をかけてきた若者が、馴れ馴れしい笑いを浮かべて立っていた。

「首は、もういいのか」

吾助は、若者を警戒するような姿勢を崩さず、頷いた。

彼の心の中に、漠然とした不安が兆した。この男は、おれが二両もの大金を持っているのを知って、わざわざ後をつけてきたのではないだろうか。顔付きはどこかあどけなく、悪い男には見えないが、見た目とは違う男かもしれない。だが、相手にしないのも、変に疑われる原因になるだろう。吾助は憂鬱な気分になっていたが、努めて明るくこう答えた。

「いや、なんでもない。大丈夫です」

「そうか。じゃあ安心した」

若い男は、当然のような顔をして、吾助の座っている横に腰を下ろした。

「ところで、じいさん。どこまで行くんだい」

男は、道連れを探しているふうだった。

だが、吾助にはそれが不気味に感じられた。彼は男に軽く会釈すると、娘の方を向いて声をかけた。

「お代は、ここに置いていくよ」

吾助は、巾着から主人に貰った小銭を取り出して長椅子の上に置くと、慌ただしく立ち上

がった。菅笠と風呂敷を取り上げ、小判を縫い込んだ襟の部分を反対の手で隠すように握ると、背中を若者に見せて歩き出していた。

すると、背後から、腹立たしげな若者の大声が聞こえてきた。

「なんだい。人が親切で話をしているんじゃないか。こそこそ逃げ出すとは、いったいどういうわけだ」

吾助は、後ろを振り返らず、ただ芳林寺の道を駆け上がった。

寺の門を通り抜けると、吾助は、庭を掃いている小僧に出会った。心搏も息遣いもようやく元に戻っていた。

「和尚様は、いらっしやるか。呉服屋の吉兵衛の店の者ですが」

吾助が案内を請うと、小僧は既に和尚から話を聞いていたのか、彼を連れてそのまま本堂へ歩き始めた。

廊下を歩いていくと、読経の声と木魚の音がだんだん近くに聞こえてきた。

「和尚様、お客様です」

小僧の声が聞こえると、修行中であつたが、和尚は読経を中断して振り返った。吾助を認めると、和尚は目を細めて手招きした。

「よう、おいでください。さあ、お入りください」

和尚は、手早く身の回りを片付けると、文机の下から小さな木箱を取り出し、吾助の前に置いた。そして、木箱の紐を解いて蓋を開け、中から黒い茶碗を取り出した。

「遠いところ、ご苦労でしたな」

そう吾助に劳いの言葉をかけながら、和尚は茶碗を置いた。

吾助は茶碗を目の前にして、思わず唸った。それは茶碗の価値を理解したからではない。古いだけで、格別美しいとは感じられない茶碗に、どうして二両もの値がつくのか、信じられなかったからである。

「長次郎の黒楽茶碗じゃ」

和尚からそう声をかけられた吾助は、当惑した表情のまま俯いた。自分には分からないと答えるのも恥ずかしいことだったが、分かると言えるほど厚顔でもなかった。だから、何も言えずに、ただ俯いているほかなかったのである。

和尚の口元に笑みが浮かんだ。吾助の沈黙を感嘆と錯覚してしまったのである。そこで、和尚は、茶碗を誇りたい気持ちもあつたのか、さらに吾助に手に取ってみよう促した。

「引き込まれそうな黒だが、それと同時に、手捻りの味が素晴らしい」

吾助は、恐る恐る茶碗を手にとってみたが、情けないことに、「こんなものが」という思いが余計に深まるばかりだった。名人の作だと言うが、ただ分厚いだけの湯飲みで、吾助には不器用にさえ感じられた。彼はただただ困惑し辟易していたのである。

「譲るつもりはなかったのだが、吉兵衛さんのお気持ちに負けまして」

和尚は、その茶碗がいかに価値あるものであるか、恐縮しきっている吾助に講釈した。そして、和尚は、吾助から茶碗を取り戻すと、それを再び箱の中に大事そうにしまった。

吾助は、ほっとして顔を上げた。

「小僧や、お客様に、お茶を用意しておくれでないか」

和尚は思い出したように、部屋の外に座っている小僧に声をかけた。

小僧が軽い足音を立てて行ってしまつと、吾助は風呂敷から新しい着物を取り出し、その場で着替え始めた。それが終わると、今まで着ていた着物を膝の上に広げた。

「和尚様、主人より二両預かってまいりました。道中が心配なので、ここに」

そう言いながら、吾助は懐から小刀を取り出した。そして、着物の襟の縫い込みの部分に、力を込めて刃を差し込んだ。彼は、右の襟から一つ、左から一つ、小判を取り出した。普段の吾助からは想像できない見事な手際だった。

「お納めください」

まだ驚いたような表情をしている和尚の前に、吾助は二両の小判を置いた。

吾助は、風呂敷包みを胸の前に大事そうに抱いて、帰りの道を歩いていた。実は、茶碗の

木箱は着物で包まれ、それが風呂敷の中にある。多少かさ張って持ちにくくなるもの、念には念をといて気持ちからであった。

芳林寺から既に三里以上歩いてきた。足は重く感じられるものの、彼の膝と腰は不思議なことにほとんど痛まなかった。店まであと僅かの道程になっていることが、彼の心に緊張を与えているのかもしれない。

すでに町の中に入っていて、家並みが続いていた。通り過ぎる人の数も増え、夕刻は近付いているものの、町の賑わいが感じられた。

あと少しだ。そうすれば、お店に無事に辿りつける。吾助は、自分の心を励ますように、そう声に出してみた。

と、その時である。カンカンカんと、慌しく鐘を打ち鳴らす音が、周囲にこだまし始めた。

吾助は、咄嗟に、どこか近くで火事が起こったことを悟った。半鐘の音は次第に激しさを増した。明らかに尋常な事態ではなかった。周囲から大勢の人が駆け出す足音が聞こえ、その騒ぎに驚いた犬の吠える声も交じった。

人々が向かう先を見ると、暮れ始めた空が激しい赤で燃えていた。背後の炎の色で、家並みがかくつきりと際立って見えた。

この時、吾助は、自分が人の波に巻き込まれそうになるのを恐れた。そして、胸の前に抱えた風呂敷包みが、火事場のどさくさに紛れて盗まれてしまわぬようにしなければと、緊張した。

「火事は、どこらだ」

「材木町の方だ」

「火消しは、やってきたかい」

「火が強くて、近付けないらしい」

やじ馬の勝手な臆測が聞こえてきた。喧騒の中で、人の群れはまた膨れ上がり、火が見える方向へ徐々に動き始めていた。

吾助は、いつしか流れの中に巻き込まれ、自分も大勢の人たちと同じ方向へ流されつつあるのを感じた。ここにこれ以上立っていても、大変なことになる。不安な気持ちが吾助を襲ってきた。

人の流れと反対の方へ体を向けようと努めたが、後から後から走り寄ってくる人のため、自由がきかなくなっていた。吾助は戦慄を覚えた。

吾助は、しばらくの間、人波に流されないように必死で踏ん張っていた。だが、後方から強い力で肩を押されると、彼は思わずよろめいた。体のバランスが崩れたところへ、また別の誰かの肩が吾助を突き飛ばした。彼は、風呂敷包みを抱えたまま、前のめりに倒れかかったが、それをぎりぎりのところ堪えることができた。さっきまで被っていた菅笠が消えていたが、それに気が付かないくらい、吾助の動揺は激しかった。

すると、――。

「じいさん」という男の声がどこからか聞こえてきた。伏せていた顔を上げると、例の若者が笑いながら立っているのが見えた。

「こんなところで、うろろろしていると転んじまう。大丈夫か」

吾助の様子を目にして、若者はこう優しい言葉をかけてきた。

「へえ、大丈夫です」

吾助は、茶屋を出る時の怒気を帯びた若者の声を思い出し、警戒しながら答えた。若者は邪気のない表情をしているが、腹には一物あるのかもしれない。

「もう少し人のいない方へ行こう」

そう言うて若者が近付いてくるので、吾助は風呂敷包みを胸に抱きかかえて、一步後ろへ退いた。全身が恐怖のために硬直するのが分かった。

「じいさん、その風呂敷包みをよこしな」

二人の距離は二間ほどになっていた。その時、吾助の口から「ひっ」という悲鳴が漏れた。盗まれてしまう、と直感したのである。と同時に、吾助は若者に背を見せると、無我夢中で走り出していた。

「おい、待てよ」

追い掛けるように怒声が聞こえてきたが、吾助はそのまま足をとめずに、大勢の人の間を縫いながら百間近く駆け続けた。捕まったら、どんなことになるか恐ろしかったから。

息が苦しくなり、意識が遠くなりかけたところへ、横合いから荷車が飛び出してきたのが見えた。目の前に荷車の車輪が迫っていた。寸前のところで衝突を避けることができたが、吾助は足元をふらつかせ、つんのめった。

その瞬間、吾助は、風呂敷から着物がこぼれ出ようとしているのを見た。それを慌ててかき寄せようとしたが、着物の間から茶碗を入れた木箱が落下するのを止めることはできなかった。それは、ほんの一瞬の出来事だった。吾助の体も地面に逆さまに転がっていた。

吾助は肩を強打したが、それでもすぐさま起き上がると、木箱に飛びついた。後ろから来た男の足が木箱を踏み付ける直前、辛うじてそれを拾い上げることができた。

人の群れが行き過ぎるのを、木箱を抱きかかえ地面に蹲ったまま、吾助はじっと待った。ようやく人の話し声と足音が遠のいた時、吾助は、のろろと地面から起き上がった。

箱を持つ吾助の両手は、彼の心の中を映し出すように異常に震えていた。箱の傷みは大したことにはなかったが、中の茶碗が無事かどうかは全く判断できなかった。

吾助は、恐る恐る木箱の蓋を開けてみた。箱の底の茶碗は、一見しただけではそれほどひどく壊れているようには見えなかった。

分厚い茶碗の作りが、思わぬ幸運をもたらしてくれたのだらうと、ほっとした刹那のことである。吾助は、黒い茶碗の縁の部分が白くなっているのを発見した。薄い闇が迫っていて、黒い茶碗の細かい部分は判然としなかったが、確かに欠けた白い部分は異様に目立って見えた。

慌てて箱の奥を調べると、確かに欠け落ちたと思われる破片が転がっていた。

吾助は、悪寒が走るのを感じた。目の前が真っ暗になり、その場に動けなくなった。

吾助は、さつきから裏口の戸を叩いていた。だが、その叩き方があまりに弱いので、なかなか気付いてくれる者がいない。

しばらくそのまま戸を叩き続けていたが、その物音にようやく誰かが気付いたらしく、走り寄ってくる足音がした。

「だれ」

その声がお幸のものだと分かると、吾助はなぜか泣き出したような気持ちになった。

「わしだ。吾助だよ」

戸口が開き、そこには心配そうな顔をしたお幸が立っていた。お幸は、周囲を気にするよううに声を潜めて、吾助に話しかけた。

「吾助さん、大丈夫ですか」

吾助は、お幸に何か言おうとして一度口を開きかけた。けれど、それは声にならなかった。体の奥から絶望感が込み上げてきた。

「とにかく、中へ」

吾助は、お幸に助けられ、屋敷の中に入った。だが、それ以上はもう歩くことができず、その場にしゃがみこんだ。

お幸の手が、吾助から風呂敷包みを取り上げた。そして、風呂敷から覗いている木箱をそと取り出し、蓋を開けた。

中には、縁が欠けた黒い茶碗が入っていた。それを見た瞬間、お幸の顔色が変わった。

「茶碗が……」

お幸の驚く声に、吾助は虚ろに頷いた。

お幸は、しばらく思案するような目付きをしていた。やがて、彼女は吾助に囁いた。「いいですか、吾助さん。旦那様の所へ行くのです。何もなかったふりをして」

吾助は、不思議なものでも見るように、お幸の口元を見つめた。低い声だったが、並々ならぬ決意が感じられる強い調子があった。

「それから、早く茶碗が見たいと言われても、箱を渡してはいけません。なるべく時間をかけ、ゆっくりゆっくりとやるのです」

吾助は、お幸の言葉に何度も頷いた。

だが、本当のところは、お幸の考えていることは、吾助には理解できなかったのである。ただし、事態はもうどうしようもないところまで来ていた。吾助自身も、暇を出されることは既に覚悟している。お幸に言われたように行動することで救われるとは思えなかったけれど、何かにすがりつきたかった。

「いいですね」

お幸は、吾助に目配せすると、彼を残して廊下を駆け出した。

吾助は、お幸に包み直してもらった風呂敷を胸に抱いて、吉兵衛の部屋に向かった。行灯のついた部屋の前まで来ると、吾助はゆっくりと跪いた。本当は叫び出したいくらい興奮していたが、それを隠して、中にいる吉兵衛に静かに声をかけた。

「旦那様、吾助です。戻りました」

すると、口の前に指を当てながら、主人が顔を出し、吾助に向かって手招きをした。

「ご苦勞様。よくやってくれた」

吾助は、自分の失敗がたやすく露見してしまうのではないかと脅えていた。そしらぬふりをしていても、彼の心臓の鼓動は激しく、額には汗が浮かんでいた。吾助は、主人と顔を合わさないようにしながら、次の言葉を待った。

「とにかく、和尚様の渡してくれた茶碗を早く見たいものだ」

「へえ」

吾助は、主人の勢いに気圧されるように頷いた。自分の手元を見つめる主人の視線に、彼は緊張した。

そこで、吾助は、追いつめられたような気分を振り払うように大きく一つ息をすると、風呂敷包みをゆっくりと解き始めた。

茶碗が入っている木箱がようやく中から出てきたが、吾助の緩慢な手つきに、吉兵衛は次第に苛々してきた。早くしないかとも言い出しそうな、不機嫌そうな表情が、吉兵衛の面に浮かんでいた。

主人の苛立つ気持ちを全身で感じながら、吾助は身の縮むような思いを堪えていた。

その時である。二人のいる部屋に向かって、とんとんと廊下を駆けてくる足音が聞こえてきた。

吾助は、吉兵衛の顔がさっと青ざめるのを見逃さなかった。吉兵衛の体は後ろにのけぞり、ついで早くも逃げ出す体勢をとっていた。

足音は、部屋の前でびたりと止まった。

その直後、すうっと障子が開けられた。そこには、怒りで眉が吊り上がり、興奮のために顔が朱に染まった内儀の姿があった。いつもの楚々とした内儀ではなく、何かに取り憑かれたような凄まじい表情をしていた。

吾助には、いったい何が起こったのか分からず、呆然として内儀を見た。

彼女は、風のように部屋の中に入り込んできた。そして、いつ気が付いたのか、二人の男が座っている場所の間に木箱を見付け、それを拾い上げた。

「こんなもの」

内儀は、凄まじい形相で木箱を畳の上に叩きつけた。それは、一瞬の出来事だった。

「お高、何をする」

吉兵衛が慌てて木箱を拾い上げると、彼女は再びそれを奪おうと、主人の腕に噛み付いた。吾助が初めて見る諍いの場面だった。

「いいですか、あなた。いつ、私がこんなことを許しました。こんなくだらないこと、許しません」

お高の絶叫とともに、吉兵衛の手から木箱が転げ落ちた。そして、畳の上に、黒い茶碗が転がり出た。

「あああつ」

悲鳴に似た声が、吉兵衛の口から漏れた。

吾助は、茶碗が二つに割れているのを見た。畳の上に四つん這いになり、歔歔している主人の背中を見ながら、彼は不謹慎にも、「よかった」と思った。

ところが、その瞬間――吾助は、なぜか腰に鈍い痛みを感じて、唸り声を上げた。

詩

●優秀賞 理由

小松 忠

退職互助部(小笠)

あいつは大酒飲みで怠け者で嘘つきで
しまいには借金で

首がまわらなくなっていたそうだ

そんなことをいくら並べても

あいつが死んだほんとの理由にはならない

生きてる俺には生きてることが

生きてることの

たった一つの理由であるように

死んでるあいつには死んでることが

死んでることのたった一つの理由であり

そうかなそんなものかな

そうとばかりは言えないのではないか

人はいつも具体的な確かな理由で

生きたり死んだりしていくのではないか

俺が生きているのも

この世への強い未練であり

愛着であり妄執であり

あいつもそんなひどく人間臭い理由で

死んだのではなかったのか

人の生死をネタにして

こんなたわいもない言葉遊びをしながら

今日も一日が過ぎた

願わくば言葉が言葉を食べるような

愚にもつかぬこの遊びが

これからも

私のひとり遊びとなりますように

ささやかな

老いの楽しみとなりますように

●佳作 雷雨の夜

袴田 穂子

退職互助部(志太)

ゴロツ、ゴロツ。ビリッ、ビリッ。
ドドッ。バリバリッ。
雷の轟音に目が覚める。
布団を被り、耳を塞ぐ。
ザーザー。雨足激しくなる。

こんな時、
あなたが傍に居てくれたらと、
詮無いことと、知りながら、
独り怯えて、震えてる。

やがて、
雷の音が遠のく。
布団をはねて顔を出す。
雨は、ザーザー。土砂降りに。
樋を流れる水の音。
庭に広がる虫の声。

こんな時、
あなたの胸にうずくまり安らぎたい。
詮無いことと、知りながら、
独り淋しく涙する。

●優秀賞 親子クジラの旅

坂部 哲之

退職互助部（磐周）

一 旅立ち

ここは太平洋、ハワイ諸島の少し北側の海です。波は凪いでおり、太陽の光にきらりと輝いています。コククジラの親子がゆったりと泳いでいます。

「お母さん、気持ちいいね」

と子クジラが母親の方を見ながら言いました。

「上手に泳げるようになったね」

と母クジラは答えました。続けて母クジラは

「まだまだ行き先は遠いから、ゆっくり泳ぐんだよ！疲れたら言いなさいね」とやさしく言いました。

「大丈夫、お母さん！」

子クジラが答えました。お母さんはっこり子クジラを見つめました。

クジラの親は、赤道付近の温かい海で子供を産み、子育てをしていたのです。母クジラは一頭しか産みません。大切に可愛い子供なのです。お母さんはその間、食事はしなく、子供に海中でお乳を飲ませて、大きくなるように育ててきました。お母さんはお腹がへつていますが、子供のために一生懸命です。その甲斐があつて、子クジラはすくすくと成長しました。体長は三〜四メートル程です。

ところで、クジラと言つても、世界の海には多くの種類のクジラが住んでいます。大きく分けて、三種類に分類されています。一つはヒゲクジラといい、上あごの左右にブラシのようなヒゲ板がびつり並んでいるのが特色で、小魚やプランクトンを大きな口を開け捕らえた後に、口にあるヒゲで海水を外に放出したあと飲み込むのです。体長三〇メートルにもなるシロナガスクジラをはじめ、ナガスクジラやコククジラやミンククジラなどがあります。二つ目は、歯のあるクジラをまとめてハクジラといい、イカや魚を鋭い歯を使って食べます。この種類にはマッコウクジラやオウギハクジラ、シャチなどがあります。三つ目がイルカ類です。イルカもクジラの仲間、便利的に体長四メートル以下の種類をイルカと呼んでいます。クジラは、いろいろな海に住んでいるといいましたが、多くのクジラは季節的に長い回遊をすることで有名です。夏の時期には北極海や南極海へ向かい、餌をたくさん食べ、冬になると、赤道付近の温かい海へ移動し、出産や子育てをすることが知られています。南極海へ向かうクジラと北極海へ向かうクジラとがありますが、それぞれが会おうことはないようです。ここで登場するコククジラの親子は、赤道付近から餌の豊富な北極海のベーリング海をめざし、北へ向かつて旅立ちを開始したのでした。

この長旅を通じて、親クジラは、子クジラに泳ぎ方、息つぎの仕方、餌の取り方、危険なシャチから身を守る方法等を教えながら、泳いで行くのです。それも一回の旅の中で教えていくのです。やがて子クジラは、親から独立していくからです。

二 いろいろな出会い

二月上旬、クジラの親子は仲間のクジラと共に、小笠原諸島近海までやってきました。

子クジラは息つぎのために海上に顔を出したとき、海上に大きな物体が浮かんでいるのに気づきました。驚いて母クジラへ

「お母さん！変な大きな黒い物が浮かんでいるよ」と不安そうに尋ねました。

お母さんもちょうどその物体を見ていたので、落ち着いて答えました。

「あれはね、私たちの姿を見に来た船だよ」

「危なくないね」と子クジラが聞きました。

「大丈夫！あの船に当たらないようにすることだよ」と母クジラが言いました。

子クジラは安心したように、母クジラと一緒にまたゆったり泳ぎ出しました。時々息つぎのために海上に顔を出し、息を吐くと潮がさつと上空へ昇るので、観光船の人たちが

「わあっ！すごい」と拍手をしてくれるのが聞こえます。その歓声を聞くと子クジラは得意になってジャンプしながら息を吐き、潮を高々とあげました。

やがて夕方になり、大きな観光船もいなくなり、西の空に太陽が沈みました。海上は暗くなり、空にたくさん星が出てきました。丸い月も出てきました。冬の空は空気もすんできれいに見えます。

「お母さん！高いところいっぱいきらきら輝いているものが見えるよ！」と子クジラがまた聞きました。するとお母さんは

「あれはね！お星さまだよ！丸く光っているのはお月さまで、夜になるとお空に出てきて輝くんだよ」とやさしく教えました。子クジラはなつとくしたような顔をしました。

やがて、子クジラは

「お母さん、眠くなった」と言いました。

「それでは、少し寝ましようか」とお母さんは、泳ぐスピードをゆるめました。コククジラの親子は並んで眠りに入りました。眠るといつても、長い時間は眠りません。半分の脳は起きてるといわれます。もし、敵がやってきたらぐつすり寝ている間にやられてしまうからです。短い睡眠時間だといわれますが、親子のクジラは動きを止めて、ゆつくり浮かんでいます。

三 ベーリング海をめざす親子

ベーリング海といえば、六千キロから一万キロぐらいの距離です。なぜ、そんな長い距離を北上していくのでしょうか？

ベーリング海に入るには、アリューシャン列島の島の間を抜けて行かなければならないのです。

それは、六月になるとベーリング海も夏になり、氷の氷解とともに、オキアミというエビに似た小さなプランクトンが大量に発生するのです。それを求めて、はるばる南方からクジラの親子が向かっているのです。五月頃になると、ザトウクジラやコククジラが二万頭ほど、このアリューシャン列島の南側の海に到達します。その他、このオキアミを求めて、鳥もオーストラリアから飛んできますし、ニシンも集まってきます。ニシンは十万吨を数えるということですが、これは日本の年間水揚げ量の三倍だといえます。

親子クジラは、離ればなれにならないように、母クジラが時々隣で泳いでいる子クジラへ向かって、尾びれや胸びれで海面を叩いて居場所を教えます。

四月になり親子のクジラは、他のたくさんクジラと共に北海道の近くの沖合までやってきました。知床半島羅臼の陸地からも、たくさんクジラが北上していくのを見ることができず。

四 おばさんクジラの話

コククジラの親子が、北海道の知床半島の沖合を北上しているとき、あるおばさんクジラと出会いました。そのおばさんクジラは、親子クジラにやさしく話しかけました。

「こんにちわ、坊や元気ですか？」

「うん、元気です」と子クジラは、横を泳いでいるおばさんクジラの顔を見ながら答えました。

「お母さん、かわいいですね！」とおばさんクジラが言いました。

「ありがとうございます。やっと大きくなってきました。」と母クジラが答えました。すると、おばさんクジラは昔を思い出すように、「私にも昔坊やと同じくらいの子供がいたのだけれど、シャチに襲われて死んでしまったんですよ」とくやしそうな顔をして語り始めました。親子クジラは、おばさんクジラと一緒に泳ぎながら、話を聞きました。

「ちょうど、最初の子供が生まれて、仲間とベーリング海の食料を求めて泳いで行った時に、シャチの数頭に囲まれて、子供がねらわれました。私も必死に子供と離れないように、背中に乗せたり、すぐ近くを泳ぐようにしながら防いだのですが、シャチは子供に体当たりして、私と離そうとしました。私も必死にシャチを尾びれや胸びれで追い払いましたが、敵は、子供を両脇から二頭ではさみ、もう一頭が上から押さえつけるのです。息つきをさせないようにして、窒息させるのです。その結果、子供は逃げられなくて窒息して死んでしまいました。その子供の顎や舌を食いちぎりました。私はどうすることもできず、海中へ沈んでいく子供を泣きながら追いました。辛かったですよ。今思い出しても…。この近くまで来ると、よい死んでしまった子供のことを思い出すんですよ」とおばさんクジラは、涙をためながら語

りました。じつと聞いていた母クジラは、他人事ではないと思いつながら、真剣に聞いていました。さらにおばさんクジラは、

「ベーリング海へもう少しという場所に、シャチは特に待ち構えているから、ぜひ気をつけなさいよ。一つ目は、必ず仲間のクジラと集団で行くこと。もう一つは子供と離れないこと。必ずシャチは子供のクジラをねらってくるから」と母クジラへ注意してくれました。子供は泳ぐスピードが遅いことと、体が小さくて柔らかいため、シャチの餌食になりやすいのです。母クジラは、親切に教えてくれたおばさんクジラへ、お礼を言いました。

五 行く手に危険なシャチ

さて、北海道の沖合を過ぎて、クジラの親子がお互いに顔を見つめ合いました。

「だいぶ北上してきて、水温もさがってきたね。大丈夫？」とお母さんが言いました。

子クジラは、

「大丈夫！」

と自信ありげに答えました。

「もう気をつけなさいよ。シャチが現れる海域にさしかかったから…」

とお母さんは、子クジラに注意を促しました。

親子のクジラの向かっているアリューシャン列島の海域には、あちこちから集まってくる魚やクジラなどを、シャチの群れが待ち構えているのです。シャチは海のギャングとも言われ、海の生物の中ではトップに立つ王者なのです。

シャチは、魚はもちろんアザラシ、ペンギン、鳥、イルカ、シロクマ、クジラさえ食べてしまいます。シャチは雄で約九メートル、メスが七メートル程で、体重は雄が七トン、雌が四トンで、スピードは時速五六キロはです。だからクジラでもシャチに追われたら逃れることはできません。

子クジラは生後一年以内に、半数は厳しい長旅やシャチに襲われて死んでしまうとされます。

ところで、このような天敵のいないシャチは、平均寿命もオスで四五歳、メスで五〇歳と言われます。しかし、厳しい環境ですのでシャチの子供も六ヶ月以内に半数は死んでしまいます。また、大人になってもたくさん食料をとらないとシャチも死んでしまうのです。毎日約二七キロ食べると言われています。動物の世界では、強い動物が弱い物を食べ、その食べた動物がまた更に強い動物に食べられるという食物連鎖の世界があります。これは、陸上の世界でも植物を食べるシマウマやヌーなどを、ライオンが食べてしまうのと似ています。動物界の悲しくも厳しい宿命とも言えますが、もつと生きたいとか、もつと家族と楽しく過ごしたいと思っても、不幸にして他の動物に食べられたり、病気になって命を全うできずこの世を去っていく動植物の存在を忘れてはならないと思います。

六 コククジラの親子が危ない

クジラの親子は、他のたくさんクジラと共に、アリューシャン列島に近づいてきています。たくさん島々が連なっている中で、クジラたちは、狭いユニマツク海峡を通過していくのです。時期は六月。親子の旅も、終盤に近づいています。この海峡を通過すれば、オキアミがいっぱい発生するベーリング海です。

「お母さん！もうすぐ？」

と子クジラは聞きました。

「もうすぐだよ！頑張れ！」

と母クジラは言いました。母クジラは、以前にもこの海峡を通過しているので、およその距離は分かっているのです。

「この海峡を越えると、たくさん食べ物を食べられるからね」

とお母さんは、子クジラへ言いました。

何も食べていないお母さんは、自分に言い聞かせるように言いました。

子クジラも長旅で、すっかり泳ぎも息つきも上手になっています。

もうすぐで、海峡に近づこうとしていた時です。

はるか後方から、五頭のシャチが親子に迫ってきました。この海峡近くで獲物を待ち伏せしていたのです。お母さんは、近くを泳いでいる仲間のクジラ達がスピードをあげたので、

天敵のシャチが接近してきたのを察知しました。親子クジラもスピードをあげました。

「シャチがきている！早く泳ごう」

とお母さんが言いました。

子クジラも

「うん」とうなづきましたが、子クジラにとっては最初の体験です。体が緊張しました。しかし、スピードはシャチにかないません。あつという間に、シャチはクジラの親子の背後につきましました。

横を泳いでいる子クジラへ

「お母さんから離れないで！」

と強い口調で言いました。

「分かった」

と子クジラは言いながら、母クジラに寄り添いました。

その時です。親子を取り囲んだシャチのうちの一头が、下から子クジラをめがけて体当たりしてきました。その衝撃に子クジラは

「あつ！」

と叫んだ瞬間、母クジラから離されました。恐ろしい恐怖に子クジラは、

「お母さん！助けて！」

と叫びました。海面近くへ押し上げられた子クジラを、シャチが取り囲みます。母クジラは、必死に子クジラを助けようと海面近くへ浮上し、取り囲んだシャチと子クジラの間へ、大きな体を割り込ませました。胸びれと尾びれでシャチを打ちつけました。大きな波が立ちました。シャチもあきらめません。親からの攻撃を避けながら、子クジラを狙っています。子クジラも必死で母クジラに近づきます。母クジラは、おばさんクジラの話の思い出し、

「早くお母さんの背中にのりなさい」と強い口調で言いました。

子クジラは息が苦しくなっていたのです。シャチの攻撃をかわしながら、やっと母クジラの背中にしがみつきました。しかし、シャチはあきらめません。背中にのった子クジラをめがけて、突進してきます。その攻撃をかわしながら、母クジラは海面に子クジラを上げさせ、息づきをさせます。自分はじっと息づきを我慢したままです。あと少しで海峡です。次第に親子に疲れがたまり、動きが鈍くなってきました。シャチは、獲物を前にしてあきらめません。今度は背中の子クジラをめがけて体当たりしてきました。子クジラはまた、母クジラから落ちてしまいました。気絶してしまいました。母クジラは疲れがピークになっていますが、必死にシャチを追い払おうとしています。母クジラはまた、子クジラへ寄り添いました。

「しつかり」

と母クジラが胸びれで叩きました。子クジラは正気に戻りました。もう親子共ふらふらです。七 ありがとう、ザトウクジラさん

その時です。横から黒い大きなザトウクジラが四頭やってきました。親子を取り巻いていたシャチに向かって、うなり声を上げて突進してきました。体長一五メートル、四〇トンのザトウクジラが、なんとコククジラの親子を助けようとしているのです。ザトウクジラは親子の両側につくと同時に、シャチに向かって、強烈な尾びれ、胸びれ攻撃を開始。その攻撃でシャチの一头の体に思い切り当たりました。シャチが今度はひるみました。ザトウクジラの二頭が、ひるんだシャチの集団めがけて追撃しました。攻防すること四〇分。シャチはあきらめて親子から離れていきました。

「ありがとう！ザトウクジラさん」

と何回も母クジラはお礼を言いました。子クジラも疲れ切った体で泣きながら

「ありがとう」

とお礼を言いました。

ザトウクジラの一头が、

「無事で良かったですね」と、親子クジラの方を見ながらにっこり笑いました。そして、「困っている仲間がいたら、見過ごしできないのですよ」と言いました。さらに続けて、「やがて、私たちも寿命がくれば死んでいきますが、途中で殺されたり、病気で命を亡くす

のはつらいですよ。どんな動物でも植物でも、この世に生を受けたら、精一杯生きていたい、輝きたいと思っっているでしょう。だから、目の前に困っている仲間がいたら助けたいんです。」とザトウクジラは言いました。

親子クジラはザトウクジラの話聞きながら、ユニマック海峡へと向かっていきました。ザトウクジラは、コククジラの親子が海峡を通り過ぎるまで、後ろを泳ぎながら見守っていました。

ベーリング海に春がきていました。オキアミがたくさん発生して、クジラや魚が大喜びで食べています。コククジラの親子も大きな口を開けて、気持ちよさそうに食べています。このベーリング海は、いろいろな種類のクジラが何万頭と集まっているので、シャチもおいそれと攻撃できないのです。

赤道近くへ戻るまでの数ヶ月、クジラの親子はたくさんオキアミを食べて、栄養をつけて大きな体になっていくのです。そして、たくましくなった子クジラは、母クジラから独立しながら、母クジラや仲間と共に再びベーリング海を越えて、赤道近くの海まで旅をしていくのです。また、シャチに出会うかもしれないませんが、たくましくなった親子のクジラは、仲間と共に協力しながら、弱い仲間がシャチにねらわれていたら、ザトウクジラさんが助けくれた勇敢な気持ちを思いだして、みんなで協力しながらシャチを追い払うことでしょう。

おわり

では、第一二三、四五六、七八九回昆虫会議を始めます。会員はお尻を上げて、羽を三回羽ばたいて下さい。あーっ羽のない方はそのままで結構です。

ありがとうございます。

では、今回は「ニンゲンとの共存」について、議論を進めます。最初にミツバチ君！

われらミツバチは、本来生活のために季節毎に草花や木の花からハチミツを集めておりますが、ニンゲンは養蜂(ようほう)などと言って、われらが住むに格好の巣箱を作り、季節毎に花を求めて移動するため、われらに安住の地はなく、また大半のミツやローヤルゼリーはニンゲンに奪われて、われらは生存にカツカツの生活を余儀(よぎ)なくされております。その上、温室等でのイチゴ栽培の受粉のためにわれらを利用して、この狭い空間の中で過労死する仲間が急増しておるのです。由々(ゆゆ)しきことだと思われます。

ミツバチ君やハチ君、アリ君等は昆虫の中でも珍しく、組織としてあるいは社会として機能しているね。そのため昆虫には珍しい互助(ごじよ)精神に富み、また子孫の繁栄(はんえい)を目撃(もくげき)出来る、恵まれた存在なんだね。

もっともそれはニンゲンに発見されやすく、薬剤なんかで一網打尽(いちもうだじん)に殺処分(さつしよぶん)されやすいことでもあるのだが……。

議長！ボクたちカブトムシは、落ち葉や枯れ木や堆肥(たいひ)の中で子孫を増やして生きて来たのに、最近はニンゲンのデパートとかで売られるために専門の業者がいて、ボクたちを育てているらしいのです。ボクたちばかりか最近(さいきん)は外国のカブトムシやクワガタも連れて来られて、何でもとても高い値段がついていると聞きます。

それは、ヘラクレスより強いかどうかの比較が嫌だということですか？

いや、どちらが強いかなんて問題じゃないよ。外国のカブトムシやクワガタがうまくニンゲンから逃れても、ボクたちはこれを助けてやるべきかどうか、それが問題なんだよ。

どうしてですか？

議長！だって、本来日本にいない仲間が日本で繁殖(はんしよく)したり、ボクたちと交配して変な仲間が増えると困るんじゃないかな。

誰が困るんですか？

第一ボクらを分類するニンゲンが……。あつ、ニンゲンだって混血してるよね。ボクらほとんど混血して、強い仲間を増やせばいいんだ。

セミ君も何か意見はありますか？

わたしたちセミは、タマゴで産み落とされて土の中に三〜七年、やっと幼虫になって羽化(うか)しようとする時、ニンゲンの子供が見つけて標本(ひょうほん)にしたり、狭いムシカゴに入れたり、やつと羽化して成虫(せい虫)になっても、昆虫採集(こんちゆうさいしゅう)で捕まえられたり、それで高い木でシャーシャーシャー・ミンミンミン・カナカナカナと鳴いても生きていられるのは三〜六日、卵(たまご)を産んだら天敵(てんてき)のハチやらアブやらに刺(さ)されて殺され、アリの運ばれエサになるだけ、つくづく嫌な一生だと思ふな。

あーらセミさん、わたしたちを見てよ。もっとひどいわ。

ウスバカゲロウ君、不規則発言は禁止です。何か言いたいことがあれば、議長のわたし、カマキリの許可をとって下さい。

あゝ失礼。じゃいいかしら？わたしたちは幼虫の頃、蟻地獄（ありじごく）なんて言われて、お宮の縁（えん）の下なんかには円錐形（えんすいけい）の穴を掘って二〜三年、中に落ちる馬鹿なアリさんなんかを捕まえて食べてるのね。でも成虫になると口がないから、何も食わずに相手を見つけて子孫を残すことしか考えない一生なのよ。たった一日か二日よ、生きてるの。今日だってこんなことしている時間ないから途中退場します。

次はどうですか？あつ、チョウチョ君。

俺っちチョウチョはよ。みんなたいがい外見が良いだろ。それで、さつきカブトムシ議員がいったと同じ理由で、ニンゲンもチョウチョ狩りするのよ。大きな年の大人がよ。大きなタモもつてさ。俺っちの好きな木や花や集まる場所を知ってるからよ、ニンゲンは。それで、鱗粉（リンポン）落とすひまもなくマスイ注射で殺されて、俺っちを何やら分類したりして標本箱にピンで止めて、おー嫌々、何が楽しくてやるんだか、ニンゲンはよ。

議長！あたいたいシロアリなの。羽がなくて悪かったわね。あんな議事の仕方あんの？羽三回羽ばたくなんて…、昆虫でも羽のないのもいるってこと、分かってるじゃない。あたいの仲間にはハアリもいるけど、それは偵察（ていさつ）部門なの、あたいたちニンゲンの家の柱や梁（はり）なんか食べちゃうけど、仕方ないでしょ、それが主食なんだから。

それに悪いけど、あたいたち案外長生きなのね。それに最近ほとんど北国まで進出して、だって暖房があったり、暖かくなったんだもの、年中。ニンゲンってあたいたち毛嫌いしてるんだからね。

おいらたちゴキブリほどのこたあーないだろ。おいらたちは何故か嫌われてんだなあー、ニンゲンに。形だつて色だつて、カブトムシやクワガタムシとちーっとも違わないと思うんだがよー。ムシが好かないってことかな？

何かここが議会であることを忘れたかの、ぞんざいな言葉が目立ちます。わたし、議長、カマキリを怒らせないでいただきます。

今までの議員諸君の意見を聞くと、ニンゲンというものは自分勝手に、われら昆虫に好き嫌いの感情を持ち、養殖させるかと思えば殺虫剤で駆除（くじよ）するなど、短い昆虫の一生を勝手に利用しておるだけじゃないか。これは断固糾弾（だんこきゅうだん）すべきと思われまますな。

しかし、別な考え方をすれば、ニンゲンに役立つ昆虫と、そうでない昆虫がいるようにも思えるが…。

あの、わたし良いですか？

あー、君は確か大きなヤブカ君、いや小さなトンボ君か？

いや、わたしガガンボです。ニンゲンはカトンボとも呼びますが…。

カマキリ議長の発言では、わたしたちガガンボはニンゲンにとって、メスのカさんのように刺して血を吸うこともなく、トンボさんのように採集の対象にもならず、興味の対象外の存在なのです。ですから、「昆虫とニンゲンとの共存」をテーマにした議論は、わたしたちガガンボなんか生きてる価値もないということになるでしょう。だって、ガガンボって名前つけてくれたのに、トンボには小さく、カには大きい、やたらと手足の長いムシという意味で、カトンボなんて中途半端な名前つけて平気なんですから…。それに議長だつて…。

そもそもニンゲンの役に立つ昆虫とか、共存を考える昆虫会議はヘンなんじゃないですか。カトンボと言われるわたしたちからすれば、可哀想（かわいそう）なニンゲンは長生きし過ぎて、退屈して、人生の楽しみのために昆虫を採集したり、飼ったみたり、ミツバチさんみたいに過労死するほど働かせてみたりしてるけど、わたしたち昆虫の中にはセミさんのように地面の中で長い時間を過ごす昆虫もいるけど、普通はニンゲンの一年のどこかの季節に生まれて、相手を見つけて交尾して卵を残し、それで子供が生まれて来るのを見届けなくて死んで行くのが昆虫でしょ。

ニンゲンが生きている数十年のうちにわたしたちは何十、時には百数十世代が交替してこの世に生まれてるんだから、わたしたちは子孫を残すという崇高（すうこう）な本能だけで生きて死ぬんだからむしろ幸せなんだと思うわ。

議長のカマキリとしては、カトンボ君、いや、ガガンボ君の発言はとても面白い。そういえば、われら昆虫には本来の悩みはないからな。ニンゲンは長生きしすぎて食べ過ぎて病気になるったり、生活が苦しいといって同じニンゲンを殺したり、ノイローゼとか引きこもりとか、モテルとかモテナイとか、金があるとかないとか、それで学問したり哲学したり、宗教とやらの熱をあげたり……、結局、長生きしすぎてヒマなんだろうね。

ニンゲンは子育てが終わってからも長生きし過ぎるし、あまり長生きし過ぎるから、おしまいは歯が抜けて、毛が抜けて、生活習慣病なんてものになって、病院通い。その上、なにやら病とかになると、自分がどこにいるか、家族の顔さえ忘れてただ生きているだけになるようですな。お可哀想に……。

それに最近は何か子育てすらもしない、いや出来ないニンゲンが増えて、幼児虐待とか養育放棄なんかもあるらしいし、何より生物存在の基本である結婚さえしない、また出来ないニンゲンも多いと聞くぞ！

それにわれら昆虫や他の動物と違って、ニンゲンはオスよりメスの方が派手に着飾ったり、顔ばかりか髪の毛や爪なんかにまで金をかけて飾り立てているらしいぞ！また何やら耳や顔や身体に光り物を埋めたりしているって、古い議事録にもある！ピアスとかイレズミとか、何とかかんとか……、無駄な生き方してるね、まったく……。

その点、わたしたち昆虫は季節は違えど、この世に生を受ければ直ちにパートナーを探し、交尾が終わりメスさんが産卵すれば一生はおしまいなんだから……。それにニンゲンの宗教に従えば、来世はそのニンゲンに生まれ変わることもあるらしいわ、ガガンボだって！別に嬉しくもないけどね。

議長！議長！あなた方カマキリさんは交尾の終わったオスを食べると聞きましたが！！本当ですか？

おお、トンボ君か、君もいたのかね。その通り！交尾が終わればメスカマキリの絶好のタンパク質だからね。われらオスカマキリは！

立派な子孫を残すためには、オスカマキリは承知の上なんだよね。そんなこと。

議長！議長！議事進行！

そうすると今回、「ニンゲンとの共存」の結論は出ないわけですか？

いや、われら昆虫の議論の仕方、ニンゲンの役に立つか否か、ニンゲンにかまっってもらっているか否かの誤った考えがあったわけだね。

一体、われらが生きているのは、自然のサイクルの中で昆虫それぞれが立派な子孫を残して行こうと努力しているだけのこと、ニンゲンも結局は同じ生物なんだろうが、昆虫と違

って長生き、それもわれらの何十世代にもわたる人生のお陰で、われら昆虫にない深い悩みがあることが分かったわけだね。

カトンボ君！そうだよね？

はい、ニンゲンは意識してるかどうかは分からないけど、地球上にいる動物・植物はお互いに依存し合う存在であり、対立し合う、つまり天敵（てんてき）とか、食物連鎖とかがあって、弱い物・小さなものが食べられてはいても、それがこの地球の環境を形作っているのですから、この生物多様化が地球生物のバランスを保っているときれるのです。

ですから、触ればすぐに手足の取れそうなたたしちガガンボも、何らかの役割があつてこの世に存在しているんだと信じています。

それから、もうカトンボなんて呼ばないで下さい議長！わたしたちガガンボですから！

議長！そうすると、われらミツバチは悩みある可哀想なニンゲンに搾取（さくしゆ）されても良いと言うのか！仲間のアシナガやチュウクマンやズメバチに話をつけて、ニンゲンを襲（おそ）わせてもいいんだぞ！

そうだ！ぼくたちカブトムシがケンカさせられたり、売られてニンゲンの子供のオモチャにされても良いのか！短い一生を棒に振るんだぞ！

いや、そういう次元じゃないんだが、ミツバチ君たちは最近働き過ぎで大量死したこともあつて、ずいぶんニンゲンも気にかけているようだし、ニンゲンの研究の結果、過労で過密なミツバチ君たちはビールスに感染した上、カビにより大量死するのではないかといわれているね。最近では農業被害も疑われているね。しかしニンゲンもきつと環境対策を考えてくれるよ。カブトムシ君はニンゲンによる養殖の関係で、昔より仲間が増えているようじゃないか。それにニンゲンは可哀想な長命者なのだから、われら昆虫のオスたちは、その美しき姿・りりしき姿・可憐な姿を見せてニンゲンを楽しませてやっても良いのではないかと言うわけさ。

おつ、議長！そのオスがきれいめでスはそれほどという見方はニンゲンの見方じゃないのかい。俺たちチョウチョはよ。そりやオスはきれいさ。そりや短い一生で早くメスさんに気づいてもらいたいから、チョウチョのオスは着飾るわけさ。セミさんのように大声で鳴けないからね。

議長！もう自由に発言して良いですか？

可哀想なニンゲンは生まれながらに「生・病・老・死」と言う業（ごう）を背負（せお）って生まれるそうです。わたしたち昆虫はたとえどう生まれようと、そんなこと考えてるヒマないくらい一生は短いのですが、ニンゲンはその業の上にさらに、欲張りの着物を何枚も何枚も重ね着しているような人生だから、本当は何のために生まれて来たか、何のために生きているのかなんて考えて、悩んでいるんですって、そんなニンゲンで一体幸せなのかしら？

ボクも知ってる。その欲張りの着物を脱（ぬ）ぐとニンゲン本来の仏性（ぶつしょう）とかいうものが現れて、この世は虚仮（こけ）、仮の姿で来世（らいせ）は極楽（ごくらく）に生まれ代われると言うやつだろ。そのための努力というか、苦行というか、しなくちゃいけないニンゲンは案外（あんがい）気の毒な存在なんだ！

南無阿弥陀仏とか南無妙法蓮華経とかアーメンなんて唱えたり、おみくじを引いたり、手相とか家相とかも見てもらうんだってさ。

ニンゲンで本当に可哀想だね。ボクら短い一生だけど、ほとんどの昆虫は子供の顔も見ないで死ぬけど、後のことは何も心配なんかしないで、チリのように消えるだけなんだからね。ニンゲンの言う義務だけ果たして、権利なんて求めないものね。

ニンゲンで自分たちの組織や国家のためにニンゲンを殺すだけじゃなく、個人の欲望（よくぼう）のためにも同じニンゲンを殺すんだぜ！

アリスさんやハチさんも組織防衛のためや、生活や何やらで他の昆虫仲間を殺すけど、同じ仲間を殺す昆虫はないわ！

その場合、ニンゲンの仲間殺しはどうなるんかい？当然みんなでリンチなんじやるが？

いやいや、ニンゲンには人権てなものがありますそうで、裁判とかをして、何か弁護するニンゲンもいて、殺され損のようですな。

そら、おかしい。この自然界では弱者が強いものに殺され食べられていても、自然と調和がとれる社会なのに、だからわれら昆虫もそのサイクルの中で生まれ育ち産卵して生を終わるのに、もちろんその途上で他の昆虫やニンゲンや動物に、場合によっては食虫植物に一生を締められる場合もあるが、そら、運命や。自然界の成り行きや。運悪く弱い劣ったものが淘汰（とうた）されるのは仕方ないことや。

だが、ニンゲンはニンゲンを殺しても自分は殺されなくてすむなんて……。もう自然界の掟破り（おきてやぶり）ですな。舌（した）あかみ切って死ぬべきです。生きてる価値も生きる価値もありませんからな。それに自殺つてもものもニンゲンだけの特技なようですから……。

議長！議長！ここらでお開きにしませんか。もうこんな獯猛（どうもう）なニンゲン批判しても意味がありません。わたしら昆虫や動物がいなくなつてニンゲンは初めて、自分たちの傲慢（ごうまん）さに気づくのでしょうか。

いや、議長としてこのカマにかけて誓（ちか）うが、ニンゲンが自分たちの滅びに気づくことは未来永劫（みらいえいごう）あり得ませんな。ニンゲン社会の価値観は多様（たさむ）いや分裂しており、アリスさんやハチさんの社会のように、もうすでに完結（かんけつ）した社会じゃないから、いつまで行つても自分たちの滅びは予見（よけん）出来ず、人権だの権利だの国益だのと便利な口や頭を使って、ますます混乱（こんめい）した社会を続けることになるだろうね。

地球環境の破壊者（はかいしゃ）、昆虫を始めとする動物・植物の大量破壊者ニンゲンは、それでも神の国・極楽・天国を夢見て生きるんだろね。来世は地下生活の永いセミ君だったり、あの草食らしいヤギ君だったりになるかも知れないのね。

今（こん）会議では、カトンボ君、いやガガンボ君の意見を始め、なかなか良い意見や発言が見られました。季節が変わると議員構成も大幅（たふく）に変わるがこの昆虫会議の特色ですが、この第一二三、四五六、七八九回会議の記録は、いつもの多羅葉（たらよう）の葉の裏に記録しておくので、よろしく！

では、第一二三、四五六、七八九回昆虫会議はこれで閉会とします。今回は「温暖化とその対策」です。それぞれの立場で、温暖化の適・不適を考え、生活圏の移動の必要のある場合は、議会事務局に届け出て下さい。では散会！

えっ、多羅葉？ニンゲンが常緑樹（じょうりよくじゆ）と分類し、「ハガキの木」と呼ぶ木で、タンニンが強く葉の裏に文字を書くとき少くとも半年は文字が消えない便利な記録保存の木なのだよ、それにムシも食わないからね、君！記録には絶好なんだよね、この木の葉

は…ね。

海辺の小さな村の、南側の港から、北側の高台のお寺に通ずる、幅一間、長さ半里の一本道は、なぜか今でも「鈍亀街道」と呼ばれている。

一間(約一、八メートルほど)。半里(二キロ)。「鈍(どん)にぶい」

二百年ほど前、村人たちは殿様に願い出た。

「川沿えの今の道は、二人がすれ違うのがやつとで、荷車も通れませんで、北側の農産物と南側の魚介類を売買するのに、一度に多く運べず不便をしております」

漁師たちも農民たちも、荷物を背負って運ぶだけだったので、物価は安くならなかった。

「荷車が通れば、新鮮な魚がたくさん食べられるのに。干物がまんか」

「しおれていない野菜を、腹一ぱい食ってみたいな」

正月もお盆も、祭りでも、新鮮な食物での食事は十分でなかった。

さらに村人たちは、こう申し上げた。

「がけ下や湿地帯を通らなければならぬので、こう水や津波が襲ってきたら逃げられません。これまでも、何人かが命を失っています。お願いですから、道を作ってくださいたいのです」

村人たちの長年の夢だった。

殿様から、人足による道ぶしんの命令が出された。

「村人の農閑期に、海に近い南地区の者と、門前に近い北地区の家は、一軒から一人の人足を出し、海岸から寺の門前にかけて、巾一間、長さ半里の道ぶしんを行うこと」と。

人足⇨賃金無しの強制作業 道ぶしん⇨道路工事

北地区と南地区は話し合って、

「仕事が暇になる十月から、半分ずつ工事を始めっぺ」と決めた。

今のようにダンプカーやショベルカー、ローラーなんていう便利な機械の無い時代だ。

作業は、くわやつるはしで山を崩して、低い所はモッコで土を運んで埋め、突き固めて平らにしていくのだ。

だから、ひと冬がかりの作業になりそうだった。

「こんな工事は割にあわねえ。人足頭(かしら)は、くそ真面目な亀にやらせべえ」

北地区の人々は、亀太郎に押しつけた。

そんなことを知らない亀太郎は、

『「おれ達が作った道だ」と、孫末代まで自慢できる、いい道を作ろう」と人々に協力をお願いした。

いつぼう、南地区の人々は、要領のいい兎吉に頭を任せた。

「一文の金にもならん、人足仕事だ。さつさと終わっちいまって、いい正月をむかえるさ」

兎吉は、自信ありげににんまりとした。

人々は、人足頭が兎吉と亀太郎なので、

「おとぎ話じや、兎が油断して負けおった。ここじや、どっちが先に終わるかな」と、兎と亀にたとえて話の種にした。

道ぶしんの作業は半月がたつと、南地区の工事は、北地区の倍の速さで進んでいた。

「なんで、こんなに差が出るんだ？あっちには、何か特別な道具でもあるんけ？」

北地区の人々は、ふしぎに思っていた。

ある日、北地区のもんが、南地区の現場を通り工事を見た。

「こんなにぬかるんでいる場所に、石一つも入れねえだか！」

北地区のもんは、驚いて見ていた。

「おめえんどこでは、どんな方法でやっているんだ？」

近くにいた兎吉が尋ねてきた。

「軟かけえ土は取っちまって、そこに崖を大きく削って取った石を入れ、砂利をどっさり盛って突き固めるさ」

北地区のもんは、亀太郎の工法を説明した。

「手のこんだことなんかせんでも、『雨降って地固まる』って言うんだ。畑を見てみろや。

軟らかな土も、だんだん、雨で固まっていくとクワも刃が立たねえべ」

兎吉は、フフフと笑っていた。

「ここもだ。こんなバサバサの砂地を、そのままなんけ？水が出たら、すぐに崩れぞ」

あきれて言う北地区のもんに、兎吉はうるせえという顔をしながら聞いた。

「おめえんとこは、どんなんだ？」

「砂利と粘土を混ぜて、突き固めているさ。水で砂が流れねえように」

兎吉は、フフンという顔をして答えた。

「土をならしたら、板でぶったたいて固めりやいいんだ。人がたくさん通れば、ふみ固められるし。見てみる。このりっぱな道を」と言う和高笑いした。

確かに、道の側面もきれいに整っており、誰が見てもかっこうの良い道だった。

「それで速いわけか。おれは帰ったら、亀太郎に、この方法でやるように言うべえ。時間ばつか食って、ちつともはかどらねえもんな」

北地区のもんは、感心していた。

「そうだ。時は金なりって言うんだ」

兎吉の顔は、自信にあふれていた。

北地区の人々は、南地区の方法でやって、短時間で終わるように亀太郎に頼んだ。

「いや、今まで通りのやり方でやってくれ」

亀太郎は、ゆずらんかった。

「時間と費用の無駄だ。お前ではだめだ」

地区のもんは無理にでも、亀太郎を辞めさせようとした。

「おれも、一度は役を任せられたんだ。ここで辞めては、孫末代の恥になる。おれは、役人に訴えてもやり通したい」

亀太郎の顔は、赤鬼のようになっていた。

みんなは、がんこな亀太郎にあきらめて、文句を言いながら工事を再開した。

ある日、息子の亀治が泣いて帰ってきた。

『鈍亀のせいで、来年の農作業の用意ができない』って、友達にいじめられた」

この話を聞いた女房は、

「ああいう父ちゃんだから、もう少しがまんしな」

と慰めるだけだった。

女房は、畑仕事でも夫はぶきつちよだが、一度思ったことは、とことんまでやる性格を知っていたからだった。

「正月前に終わったんで、ゆっくり休めるぞ」

南の地区のもんは喜んでいたが、北地区では三分の一が残っていた。

そんなもんで、北地区の人々の中には、

「兎は油断しねえで、どんだん先を走って行っちゃまった。これじゃ、話になんねえな」

「おとぎ話のようになるかと期待したが、ここの亀は、やっぱし鈍亀だったか。勝負になら

ねえ」
と悪口を言いあつた。

道ぶしんを節分前までに終わらせないと、農作業の作付けに影響が出る。

「おれたちも工事に出るで」

「おらたちも土を掘り、運ぶで」

年寄たちや亀治たちわらしらも、クワを持ち出してがけを崩し、湿地を埋めた。

節分の前の日に、どうにか道は完成した。

「終わったか。一時はどうなるか思った」

「一文にもならんから、兎吉のように要領よくやるべきなんだ」

「人手だな。子供たちの手も、役立ったな。うんと、猫よりましたな」

北地区のもんは、ほっとした。

「それにしても、ごつごつして、今ひとつ見ばえのせん道だ」

「明日の節分では、亀は外だ」

見た目も悪い道に、亀太郎への評価はきついものだった。

いつしか人々の間では、北地区の作った道を馬鹿にして、『鈍亀街道』と呼ぶようになった。

「活きの良い魚だぜ！」

兎吉は大八車を買い、北地区で魚を売り始めた。

「朝どりの新鮮な野菜だよ」

農家の人々も、南の地区で売りに来た。

やがて兎吉は、南地区に八百屋を、北地区に魚屋を開業した。

「兎吉は、やりてだな。目先が効くんだ」

村人たちは道ぶしんばかりか、金もうけのうまさを、改めて感心した。

亀太郎の評判は、相変わらず悪かった。

「鈍亀の背中に子亀が乗って、親亀こけたら子亀もこけた」

亀治の友達は、こうからかつては笑っていた。

やがて、梅雨時をむかえた。

「この前の雨で路肩が少し崩れたが、気にすることもないか」

「使っていりや、何でも壊れていくさ」

南地区のもんは、さほど気にしなかった。

その年は、いつになく雨の日が続き、雨量も多かった。

「三日三晩、強い雨が降り続けている。川の堤が切れなければいいんじやが」

「道は出来たが、油断はせんことだな」

北地区のもんは、心配そうに空をあおいでいた。

不安は適中した。

「大変だ！川の堤が切れたぞ！早く、お寺に逃げる！」

北地区のもんは、昔を思い出した。

「助けてくれ！」

洪水から逃れ切れずに、流れる大木につかまったまま、濁流に流された人々の救いを求める声を。

北地区のもんたちは、取るもの取りあえずに、道いっぱい広がって、一目散にお寺を目指して避難した。

「道のおかげで、命を落とすものもなかった」

新しい道は歩きやすく、短い時間で避難ができた。

「有り難い。亀のおかげだ」

北地区のもんは、亀太郎に感謝した。

雨は、止む気配が無く降っていた。

お寺の本堂ではおしようさんが、

「南のもんは、一向にやってこんが」と心配していた。

「なあに、あんなに簡単に道ぶしんした連中だ。直ぐにきますよ」

北地区のもんたちは、南地区のもんたちの素早ばしこさを知っていたので、たいして気にもかけなかった。

「えれえこつちゃ！南のもんは、道のとちゆうが流されたり、ぬかるんだ道に足を取られたりして、なんぎしているつちゆうだ！」

「川の水かさは、どんどん増えているぞ」

見回りの若者が、飛び込んできた。

「あんなに見映よく作った道なのに、案外だったんだな」

北地区のもんたちは驚いてしまったが、難にあっている南地区のもんを気づかった。

「すぐに、みんなで助けに行け！」

北地区の若者たちは、激しく降る雨の中へ飛び出して行った。

北地区のもんは作った道は、水をかぶっていたが、一ヶ所もくずれず、流されてもいなかった。

（手抜きをしたり、ごまかしたりしなかったが、ていねいな仕事は、それだけの値打ちがあるんだ）

兎吉や南地区のもんは、北地区のもんが作った道を歩きながら、亀太郎を馬鹿にしたことを恥じていた。

「今年一年間、北地区の魚屋の値段は半値にする」
兎吉は、素直にわびた。

その年の農閑期になると、南地区の壊れた道は、南地区のもんたちで整備されることになった。

「道は村の財産だ。北も南もねえ」

「うんだ。孫末代までの宝だ」

亀太郎が人足頭となって、北地区のもんも加勢にきていた。

村人は、出来上がった街道を、亀太郎をたたえる名前にしようとした。

「人足仕事でも、責任をもってやった記念の道じゃ。鈍亀街道は、いい名前じゃ」

亀太郎は、ちっとも気にならなかった。

「おいらも、『鈍亀街道』は自慢できる」
亀治をいじめる者はいなくなった。

「おとぎ話では亀が勝ったが、ここでも同じだな」

「負けるが勝ち、っていうじゃねえか」

村人たちは後々まで、こうした逸話を言い伝えたという。

山田先生は、菊作りのプロだ。その腕を買われて高学年の担任が多い。今年も五年一組の担任だ。

この学校では、昔から一人一鉢の菊作りが伝統行事だ。山田先生は、この菊作りをとおして子どもたちの性格を見抜いていく。そして、その子その子に合わせて、子どもを指導していく。

先生は、野暮ったいジャージがトレードマークだ。いつも子どもの側にいる。休み時間は、グラウンドや特別教室が先生の教室だ。その時は、まるで大きな子どもだ。子どもの中に入って本気になって遊んでいる。

山田先生が、職員室でパソコン操作をしているのを見たことがない。先生の出す学級通信は、今だにワープロでなくて手書きだ。しかも、強烈に個性的な字だ。一度見れば忘れられない味のある字だ。

先生は一週間に一度、この学級だよりを家庭に出している。これは、並大抵の労力では書けない。山田先生は、これを先生になった年からずっと続けている。

ただし、内容はバラバラだ。大好きな巨人が優勝した時は、紙面一杯がその特集だった。しかも、子どものことはほとんど出でこなかった。好きなことに没頭してしまう時はまるで大きな子どもだ。

そんなおたよりを心待ちにしている一部のファンの保護者もいる。しかし、大方の保護者は変わった先生だと思っている。だけど、子どもからの信頼は厚い。

先生の受け持つ五年一組の太郎くんは、本当に調子がよい。家の仕事は、農業だ。だけど地味な感じはしない近代的農業だ。今時の流行の花や野菜を作っている。

しかも、農園を会社組織にして、休みも多い。お父さんは、大学で近代的な農業やバイオテクノロジーを学んできた。品種改良や新種の開発で有名な農園だ。何度もテレビや雑誌に取り上げられたこともある。

新しいことや珍しいものには、すぐに飛びつく工夫好きだ。太郎くんはそれをしっかり受け継いでいる。

今度、転任してきた相馬校長先生は、県の教育委員会からやってきた。教え方や評価とやらなんだか難しい子どもにわからないことが専門らしい。そうお母さんが言っていた。

話も上手だし、服もしゃれている。子どもたちは、一見校長先生のことを好きなようだが、本当は山田先生の方が好きだ。

校長先生の話はおもしろい。歴史、文学、科学と博識な知識をベースに子どもたちにわかりやすい話をする。

今日の話は、陸上大会の話だった。陸上教室に通う龍くんは、お父さんもお母さんも元団体の選手だった。町の陸上教室の指導者をしている。

今日の指導の内容は、走るフォームと足の運びについてだった。パワーポイントを使って足の動きを動画画面で校長先生は説明した。子どもたちはプロジェクターの画面を感心しながら眺めていた。

県の教育委員会の先生や大学の先生たちがつくった、保健体育の先生用につくられた講義資料らしい。

校長先生はまるで自分が作ったかのように流暢に話をした。人から聞いた話をわかりやすいお話にしてしまうのはさすがだ。けれども、自分の手でしっかり調べたり、確かめたりはしない。

ある日、校長先生は、山田先生に尋ねた。

「先生、今年も立派に菊が育ちましたね。この中で一番きれいに咲いた菊を紹介して下さい。」

そう言うと山田先生は、並んだいくつもの鉢の中から太郎くんの菊の鉢を選んで校長先生に紹介した。

「見事だね。」

校長先生は、感嘆の声を漏らした。そして、

「山田先生、この鉢を朝礼の時、使わせてもらっていいかな。」

「えー、もちろんかまいません。でも、本当にその鉢でいいんですか。」

「もつと、きれいに咲いている花があるんですか。」

「いや、見栄えはそれが一番だと思いますよ……。」

「それなら、けっこう。朝礼の話題ができたよ。ありがとう山田先生。」

校長先生は、校長室に戻ってさっそく、お話の原稿を練り始めた。

月曜日の朝礼が始まった。子どもたちは、校長先生の話を中心待ちにしている。校長先生は、段ボールで隠した鉢をぱつと開け、太郎くんのお父さんの鉢をみんなに見せた。「おおう」という子どもたちの歓声が上がった。菊の花は見事としか言いようのない黄色い花だった。

太郎くんは、くすつと笑った。山田先生は、僕にいつも丁寧な雑草を取れ、水をかかすなと言うけれどお父さんにもらった薬の方がよっぽど威力を発揮する。

校長先生だつてほめてくれる。あれほど、丁寧に面倒を見ている貴史の鉢は、結局端に置かれっぱなしじゃないか。やっぱり、薬には勝てないんだよ。そう思っていると校長先生は太郎の名前を呼んだ。

「太郎くん、どんなことに気をつけて菊を育てたんだい。」

太郎は、

「毎日、水をやり丁寧に観て雑草を取り、元気に花を咲かせてねと声をかけながら育てました。」

と山田先生の教え通り優等生の発言をした。

すると、校長先生はさらに満足したように太郎くんをほめ称えた。しかし、校長先生は貴史くんの悲しそうな顔には、気がつかなかった。山田先生は、五年一組の子どもの様子を見た。そして、貴史くんに声をかけてやらなければと思った。

貴史くんは、やつぱりなと思った。いつも僕はだめだ。山田先生の言いつけ通りに間違はなく学校で一番に菊の面倒を見た。

「一番面倒見た子どもの花が一番きれいな花になる。」

と山田先生は言った。けれども、うそだ。あんな適当な太郎くんの花がお父さんからもらった薬をかけて一番きれいに咲いている。校長先生だつてほめてくれる。

夏休みだつて、毎日水やりに来たのは僕だけだった。山田先生だつてそれを知っているはずだ。いつも、僕がみんなの分まで水やりをしていることだつて知っているはずだ。

先生は、いつも声をかけてくれる。

「きつと、貴史の花は、クラスで一番きれいな花が咲くぞ。」

と励ましてくれた。

けれども、結局ほめられるのは太郎くん。夏休みには、僕に

「当番を替わってくれ。」

と電話をかけてきた。僕は、いつもお願いばかりされるので、ちよつと嫌な気分になって、

「なんか用事があるの。」

と言った。

すると、太郎くんは

「ちよつと用事があるから、貴史くん替わってよ。」
となんか甘えるような声を出してきた。そう言つて太郎くんは、いつも僕を頼りにする。またいつものごまかしだ。僕は、ちよつと腹が立つて

「大事な用事なの。」

と聞いてみた。

すると、

「じゃあいいよ。他の人に頼むよ。」

と言った。

そう言われると僕は弱くなってしまふ。結局いつものように太郎くんの言いなりになってしまった。

学校で水やりをしていると山田先生が声をかけてきた。

「あれ、今日は太郎の当番の日じゃなかったっけ。」

僕は、なんか先生の声が、何時になく癪に障ったけれど

「太郎くん、用事があるんだって。」

としようがなく少しふてくされながら答えた。山田先生はやれやれというような顔をした。

「貴史は優しいうえに気がいいからな。先生はお前みたいな子が好きだよ。」

そう言われるとまんざら気も悪くなくなってしまう。僕って単純だ。だから、みんなに利用されちゃうのかな。だけど、まあいいかと思った。

太郎くんは、みんなに囲まれながら教室に帰ってきた。まるで、スター気取りだ。それはそうだろう、全校児童の前でほめられたんだから。

けれど、久しぶりに菊の話題がみんなに戻ってきた。今時、花作りのような地味な仕事子どもたちには流行るわけではない。

そういった意味では校長先生は子どもたちの視点を変えてくれた。休み時間子どもたちは、菊の花をよく見るようになった。

その姿に山田先生もにんまりするのだった。花を見る人の顔は穏やかだ。そういう穏やかな顔で生きることの大切さを先生は教えたかったのだ。

そして、自分の花を慈しみ育てることの大切さをわかって欲しかったのだ。子どもたちの姿を見ているとそれだけで先生は満足だった。

近くへ寄ってみるとそれぞれが、やはり自分の菊の花へのかかわりを言葉にしていた。

「最初はがんばったけど途中はわすれてしまっていた。ごめんね。」
と語りかける子がいた。

「こんなにきれいに咲くなんて思わなかった。よかったな。」
と素直に喜ぶ子。

先生は、満足げに聞いていた。もう子どもたちにあれこれ言うのはよそうと思った。その方がいいと思った瞬間にこんな声が聞こえてきた。隣のクラスの龍くんからだ。

「今年の夏は特に暑かったし、朝の水やりだけでは菊が枯れてしまうぞってお父さんが言っていたけど、このクラスだけだよな。枯れなかったのは。」

その時、山田先生はやっぱり一言だけみんなに話そうと思った。

山田先生は、菊づくりのことについていろいろ言ったりはしない。資料を貼っておくからねと言って教室の後ろに貼っておくくらいだ。

質問がある人は聞きに来てくださいというだけだ。直接、子どもたちに何をしろとは言わない方針だ。

若い頃、今年のような猛暑の年、先生は菊を全滅させてしまったことがある。だから、夏休みも家を長く空けることはしない。だから、家族旅行なんてしない。家族に不評だが、山田先生のこだわりだ。

だが、今年は夕方の水やりの助手がいた。そして、その助手から休みをもらった。そして、助手にも休みをあげた。その助手こそ貴史君だ。

帰りの会に先生は、ちよつと話していいかと言った。いつもとは違う雰囲気に子どもたちは緊張した。

「今日、朝礼で校長先生の話があったろう。それで…。」

先生の話が、少し詰まった。

すると、子どもたちの中から声が出た。

「先生、うちのクラスの花がみんな咲いた訳を言いたいんでしょ。」

学級委員の恵理子さんが、

「ここからは、先生、私たちに任せて。」と言って前に歩いて来た。

「貴史くん、前に来て。」

事情が分からず、貴史くんはそのそと前に出た。

恵理子さんは、手作りの賞状を読み上げた。

「感謝状、鈴木貴史さん。あなたは五年一組のクラスの菊をみんな自分の菊のように育ててくれました。夏休みの水やりも本当にありがとう。あなたのおかげできれいな花が咲きました。五年一組を代表して。」

恵理子さんが読み終わるとクラスのみんなが拍手をした。それは、朝の朝礼の時より大きな力のこもった拍手だった。山田先生は、もう何も言うことはなかった。そして、やっぱり、自分は、子どもに教わることばかりだなと思った。

●優秀賞

筆致は平明・優しい語り口調

佐吉の幼・少年期に恣意からの創作の筆跡

高柳 幸夫

退職互助部（湖西）

はじめに 豊田佐吉の生誕地・湖西市では郷土の生んだこの偉人について書かれた小伝、略伝の類はこれまでも数点刊行されている。だが、残念ながら、佐吉の本格的伝記、評伝は、いまだ上梓をみていない。郷土の一市民として私は、今後、市を挙げて精査取材し、著述推敲校正には念には念を入れ、過不足のない人間佐吉の『実人生（実像）』をよく伝え得る作品が一日も早く市民の手に渡る日の来ることを心より願ってやまない。

私は教職定年退職後、郷土の先人豊田佐吉の苦難に充ちた生涯を追いつづけてきた。

多くの佐吉伝記諸本を讀書三昧していると、佐吉伝記中の「生い立ちの記」にしばしば登場する人物に不審の念を抱いた。佐吉少年を親身になつて―恩師のごとく―教え導く隣り村の小学校の先生である。多くの作品に「佐田という先生」あるいは「佐田先生」と記されている人物である。その先生の「実名」は何処にも記されてはいない。（名無しの権兵衛先生といたいだが、姓は「佐田」とあるのでそうまでも言えぬ）

事跡を最重視して記述する伝記作品中にこのような曖昧模糊とした人物が「登場」するごと自体、全く奇妙なことである。

私はこれまでに静岡県教職員芸術祭文芸部門にソノことを精査検証し得た結果を投稿発表してきた。詳細についてはブログに譲り、ココでは、『結語』をのみ略記しておく。

結語 「佐田という先生」は豊橋の中等学校にも、隣り村の小学新所学校にも奉職されてはいなかった。

そのような先生は世に実在しなかった。

さて、本小伝が発刊された事情を記しておこう。平成二十四年度は、湖西市が市制を敷いて40周年になることから、

『湖西市市制40周年記念 湖西市再発見』なるスローガンが市側で掲げられた。本書はその趣意を汲み、具体化した施策の一つとしてコノ学童向き佐吉小伝が編集発刊をみたわけである。（ほどなく「佐吉生誕百五十年」の年も近づいている。その年には？）

本小伝を手にした私は、副題が『豊田佐吉ものがたり』とあることから、

「本書は佐吉その人の実人生を精査し書き上げたものではなさそうだ…」と、直感した。コノ「佐吉ものがたり」も、世にある偉人伝によくみる「伝記物語」の一つなのだろう、と速断した。読んでみなくてはソナナコトハ、と言われるだろうが、私は「伝記」と「物語」とは同じではないことをよく認識しているつもりだ。「伝記」はノンフィクション部門に入るが、「物語」は文学部門に入る分類から、全く別分野である。「物語」は一見「伝記」の如く思われもされようがその実、作者の恣意による筆から成る創作で、この点からノンフィクションを建前ないしは前提とする「伝記」とは、似て非なる作品なのである。

「豊田佐吉ものがたり」という副題から、本書もまた偉人の伝記という名の読み物に成り下ったものだろうと、疑念が横切った次第。

世の学童伝記にはコノ「伝記という名の読み物」がとりわけ多い。花盛り大盛況である。ところで、このような「伝記風読み物」では、『湖西市再発見』といった高次元の「願い事」が成就されるのだろうかとか心配になる。（期待外れに終わりはしないかと危惧される）

学童らが瞳を輝やかせ、一字一句をかみしめて、佐吉の人生を共に呼吸する中、内には琴線に触れるところが大きいあってこそ、初めて彼ら彼女らはまた一つ大きく成長するのである。

その過程こそが、『湖西市再発見』でなくて他に何を『再発見』と呼べようか！

ここからは「作品評」に移ろう。

本書の体裁はB5版、80頁の学童向き豊田佐吉小伝である。私は「小伝」と記しはしたが、副題に「豊田佐吉ものがたり」と表記されている点に注意を払うことは既に触れた。作者は、浜松市在住の童話作家。湖西市を熟知する人である。学童らに平明・優しい口調で語りかけるソノ文は朗読にも適し魅力的だ。本書中には素朴は筆になる十葉もの折々の挿絵も付され心引かれよう。最終章の自動織機発明を語る段には性能世界一の2種の織機が鮮明なグラビア写真で紹介されている。巻末には佐吉の略年譜と佐吉翁と敬慕された晩年の肖像写真。本書を読み終えた学童らは皆々、翁が優しく見守り語りかけているようにも感じられようか。編者の配慮の程も伝わってくる。

本書の梗概（紙幅の都合上、各章の見出しと筆者のコメント風注記のみ）

本書は、発明一筋に生きた郷土湖西市の生んだ偉人豊田佐吉の一生を学童向きに平明に語った伝記物語である。

1 じょうぶなからだに、なりたい

〔注記〕学童の佐吉が遠州吉津村山口の自宅から三河の岡崎まで独り歩いて（一泊して）岩津天神を参拝したエピソード。

2 兄ちゃん、たこあげ名人

〔注記〕佐吉は凧作り、凧揚げの名人。二人の弟らも自慢げであった。（湖西の地に今も伝わる『佐吉凧』 佐吉は凧も工夫一つでよく揚がる、と言い、揚げながらも人々の暮らしが楽になることを考えていた。

3 とりの村の先生の話

〔注記〕隣りの村とは何村か？村名を記さず、「先生」は誰なのか？氏名は書かれていない。とにかく親切な先生で校舎修理に父と出向いた大工見習い佐吉に、有益な多くのことを教えてくれる。愛蔵の本『西国立志編』も貸して下さる。佐吉の内奥の発明心をも鼓舞してくれた得がたい人物。

4 佐吉たちの勉強会

〔注記〕同志を募って始めた山口観音堂での「夜学会」。師もなく教科書もない中、相互啓発し、討議を重ね学びに学ぶ。広く知識を求める思いから「東京見物」に旅立つ。

5 お父さんとのやくそく

〔注記〕父親は佐吉に家業の大工職を継いで欲しかった。佐吉は大工には身が入らず発明一筋に研究をつづけたかった。両者は対立断絶して久しかったが、ある日、佐吉は自分の気持ちを打ち明け許しを請う。父は許さなかったが、母は優しく慰めてくれた。その後、佐吉は納屋で研究にいつそう励む。

6 さいしよの発明

〔注記〕明治二十三年の東京博覧会見学時での世に知られた事件。その年、豊田式木製人力織機の発明成就。

7 かばんをかかえて

〔注記〕明治二十七年、糸繰返機の発明。相変らず織機的设计に夢中だった佐吉のエピソード。ソバ屋にての巻。ソバを食べている時、名案が浮かびかばんからコンパス他を取り出し図面を描く。ソバを味わうことも忘れ—食を忘れ—図面を完成させる。

8 すいぞ、佐吉さん

〔注記〕明治二十九年、木鉄混製動力織機の発明。愛知県乙川村にソノ織機60台備えた織布工場を新設。機械織り織布の美しさ。

9 世界一をめざして

〔注記〕イギリスのプラット社の織機に負けぬ織機発明を期し、研究をつづける。

西欧を訪問し、機業界をつぶさに視察する。

10 障子をあげてみよ、外はひろいぞ

〔注記〕中国上海に紡織工場設立。内には長男喜一郎に創設したトヨタ自動車会社を託す。世界一の会社にすることを約束させる。イギリスのプラット社との契約成立。人々の幸わせのため一生を捧げた豊田佐吉。努力すること・新しいものを創り出すことの大切さを今に教えてくれている。豊田佐吉の名はいついつまでも人々の心に残る。

(完)

以上にみてきた本書の梗概から、作者は佐吉生涯にわたる複雑多岐な諸事象を欲ばらず精選し得ている。また、学童らに親しみ易い口語調で話しかける文章にしている。ソノ心配りには頭が下がる。作者那須田氏は講談社児童文学新人賞を受賞して以来、サンケイ・毎日などの出版文学(化)賞を受賞した優れた童話作家である。書かれた内容に各所の描写にその力量の程は、十分うかがわれよう。

私は童話作家ならではの柔らかな筆の調べを読む中に感得した次第である。難しい言葉は控え、学童らを念頭に、平明達意の語りかけの文体は一貫している。

今後、湖西市内の小学校では、「郷土の学習」の一環として本書を用いた学習がなされるであろう。(これまでも「わたしたちの郷土」について佐吉のことも学んでいる)

学童らは教室で本書を声高に読み、感想を交えることで、さらには教師の適切な助言指導とあいまって、本を読む楽しさ、郷土の先人から学ぶ喜び、明日に向かって生きゆく姿勢、人生で大切なことから等々を各自各様に学びとることであろう。私は何か一つでもよい、心の糧になれば、と願っている。

では、本書は、良いこと尽くめ、結構尽くめで何らの瑕瑾(欠点)は無いのか?というのと、有りなのだ!問題点の一つならずある!「表題」に記されているように、作者その人の恣意(思いつき)による創作が見られる点である。他の表現を借りて記すならば、

「作者は精査・検証を怠り、思いつくままの想像から創作してしまっている」といえるようか。佐吉の「生い立ちの記」に虚構が多い。本書にはこれまで指摘した多くの美質があるものの、作者の恣意からの筆跡を残したことから「九仞の功を一簣に歎く」のたとえが、実に残念なことであるが、よく当てはまるのである。(世に「一事が万事」という言葉もある)作者には念入りに調べ確かめた上での運筆を期待して止まない。

次に問題の箇所と私の論評を託してみよう。

(一) 1 じょうぶなからだに、なりたい

わが家から歩いて遠い岡崎の岩津天神を参詣した道すがらのエピソード。子どもの佐吉は通りすがりの百姓の馬車に乗ることを勧められはしたものの、ガンとして断ったこと。これは本当(事実)だったであろうか?佐吉が他人を頼らず独力で無事参拝して帰宅した体験を美化せんがために「百姓の馬車」をここに挿入したようにも思われる。他の佐吉伝記と対比しても、「馬車への乗車拒否」の描写は見られない。恣意による創作と思われる。

(二) 4 佐吉たちの勉強会

「勉強会」とは「夜学会」(後に「研修社」と改称)、そこに大工の五郎作が出席していたとの資料を私は知らない。彼は佐吉の大工仲間・親友ながら佐吉のように夜学会に出席する意志を持たなかった職人であった。

作者の人物認識の甘さがコノ創作となったのだろう。五郎作は佐吉の大工仲間・遊び仲間。

(三) 3 となりの村の先生の話

コノ「先生(人物)」が、いちばん問題になる登場人物である。はじめのところ**結語**に明記したようにコノ「先生」は世に実在しない教師である。「となり村」とは佐吉の住む吉津村の隣村で白須賀村と新所村とが考えられるが明示されず、故意に臙化(ボカ)していることがうかがわれる。「先生」についても同手法。作者に確証の持てる「資料」等の無いこ

とも名を伏せた理由でもあろう。

ところで、このような「先生」がどうして佐吉伝記に——とりわけソノ「生い立ちの記」に——よく登場しているのか？その根拠というか病根は、わが国の伝記作家たちが精査・検証を怠り、安易に先行する同種の伝記文学作品を「棒引き」「孫引き」を重ね、何ら省みるところがなかったためであると指摘できる。「先行する同種の作品」の例として湖西市が市制施行20周年事業として平成三年に編集刊行した『郷土を愛し、国を愛した豊田佐吉翁』が挙げられる。今回の『豊田佐吉ものがたり』も同書から「先生」と佐吉との職員室での「交流場面」を棒引きしたと、うかがわれる。「となり村の先生」その実、新所村の小学校の「佐田先生」。校舎普請に棟梁の父と出向いた折の一場面がその下敷となっているのである。私の検証し得たところを次に示そう。

新所小学校の職員室から先生方が話し合う『専売特許条例』の話に聴き入り、いちずに「職員室」を訪れる場面がある。世の佐吉伝記には必ずといってよいほど描かれているところである。佐吉はそこで「佐田という先生」に『特許条例』の意義・内容さらに「発明」ということの本来の意味を教えられる。

佐田なる先生を交えたため、佐吉の虚像を結んだだけの手慰みになり終ってしまった。

コノ職員室のことが本書では、『特許条例』などという学童らに難しいことは削除して、手易な「西洋事情」を先生に語らせ、並はずれた機械好きな青年佐吉をして機械発明のことを話題としたものと思われる。このあたりは作者の潤色・虚構の筆が思いのまま走っているのが感じられる。焼き直し臭が漂う。

では、湖西市で刊行された『郷土を愛し・国を愛した豊田佐吉翁』ソノ先行作品は何か？疑問は、次から次へと疑問を生む。本邦で最初に小学新所学校の「佐田という先生」を著作中に登場させた作家とその作品は次の通り。

昭和六年九月三十日発行 『発明物語 豊田織機王』 興良松三郎著（興風書院刊）

作者興良氏は新聞記者ゆえよく調べ記述してはいるが、当地方までは精査検証を怠り、恣意からの創作をしたふしがうかがわれる。

本稿の結びとして東京大学名誉教授平川祐弘著『天ハ自ラ助クルモノヲ助ク 中村正直と『西国立志編』』（名大出版会刊）を引く。「佐田先生がこの世に出たのは、豊田佐吉死後一年の昭和六年、興風書院、この架空の人物の名づけ親は興良松三郎という名古屋の新聞人のようである」（同書156頁）

「新所学校の佐田先生が実在しなかったこと、佐田先生が佐吉に『西国立志編』をくれたという美談が後世のさかしらの拵えものであることは間違いない」（同書164頁）

（完）

（対象図書名）『障子をあけてみよ

外はひろいぞ

豊田佐吉ものがたり』

那須田稔著

（湖西市刊）

七月二十九日の国家基本問題研究所月例研究会で、麻生副総理は憲法改正を巡りナチスを引き合いに出して次のように述べ、国内外で物議を醸した。以下は読売新聞八月二日の朝刊に記載された、その要旨である。

単なる護憲、護憲と叫んでいれば、平和が来るなんて思っていたら大間違いだ。改憲は単なる手段だ。目的は国家の安寧と繁栄と、国土、我々の生命、財産の保全、国家の誇り。従って狂騒の中で決めてほしくない。

ヒトラーは民主主義によって、きちんとした議会で多数を握って出てきた。いかにも軍事力で取ったように思われるが全然違う。ワイマール憲法という当時ヨーロッパで最も進んだ憲法下であってヒトラーが出てきた。常に憲法が良くても、そういったことはあり得る。私どもは、憲法はきちんと改正すべきだとずっと言い続けているが、わーっとした中でやってほしくない。

ワイマール憲法もいつの間にか変わっていて、ナチス憲法に変わっていた。誰も気づかないで変わった。あの手口に学んだらどうかね。本当に、みんな、いい憲法と、みんな納得してあの憲法が変わっているからね。僕は民主主義を否定するつもりは全くありませんし。しかし重ねて言いますが、喧騒の中で決めないでほしい。それだけはぜひ、お願いしたい。

麻生氏の発言は三つの段落に分かれている。第一段落は、現憲法を全面的に是とし、これに指一本触れさせまいとする共産党や社民党等を意識したものである。これらの政党はまだ政権をとったことはないから、自らの主張を国内外の現実の政治局面と具体的に擦り合わせる役割を演じたことはない。総理大臣にまでなり、政治の現実を知り尽していると自負する麻生氏にとって、両党の主張は、ひよっとすると、机上の空論乃至は犬の遠吠えに聞こえるのかも shouldn't。だが現憲法を全面的に是とするのも一つの見解であり、それを鋭く批判するのはも自由だ。「護憲、護憲と叫んでいけば……」と言ったからといって物議を醸すことにはならない。現憲法を中心に据えて、国会で様々な考えをぶつけ合い、その過程で国民にその問題点を知らしめ、その上で国民の審判を待てばいい。

これに対して物議を醸したのは、第二、第三段落である。麻生氏が、必死になってかどくかは別として、ここで述べようとしていることを内容的にとらえれば実に単純で、第一段落で述べている「改憲は」狂騒の中で決めて欲しくない」を繰り返しているに過ぎない。ただ、内容を幾らかふくらませようとしたか、自ら言わんとすることを一層切れ味よく浮彫りにしようとしたのか、そのいずれにしても、それに歴史的具體例を加えたのだ。そしてそのことが物議を醸すことになった。この結末は麻生氏にとっては誠に惨めだったと言わざるを得ない。

だとすれば、この第二、第三段落は削ってしまえばいいということになる。しかしそれでは発言が短か過ぎる。麻生氏のこの発言が飛び出したのは、テレビの静止画像で見た限り、司会者一人にパネリスト四人が討論している時だった。だから一人の一回の発言時間には、ある程度の制限又は自主規制があってもおかしくはない。麻生氏の言わんとすることは既に第一段落で終わっているが、この場合この討論形式からみて、時間制限や活用時間の自主規制が、逆に機能したのではないだろうか。即ち述べたいことの中味が少なかったのだ、麻生氏は発話の中に増量剤（それがヒトラーとワイマール憲法だった）を入れて、その場を凌いだのではないか。もしこの例示がなければ、第一段落の内容を更に二度繰り返すことになる。雁の声ならば一度聞くより二度、三度聞く方が趣き深い、この場面では、それまで述べたことの強調になるどころか、むしろ停滞か足踏みと感ぜられ、言語使用の稚拙さと非効率性を指摘されてしまう。だが、考えてみれば、このカッコ悪さに暫く耐えることの方が、物議を醸し出した現実と直面することより遙かにマシだったのではないか。なぜなら、もしそうであれば、「あの際の、政治家麻生太郎の話術には、妙に間を持って余して（または、端折って）いるようなところがあった」という程度の印象はそこに居合わせた聴衆の心に一時的には残るが、それはマスコミに取り上げられることもなく、やがて雲散霧消するであろうから。

もつとも、第一段落の主旨をしつかり頭に収納した上で、第二、第三段落の例示の場面では立ち止まらずに足早に通り過ぎていくような捉え方をする人もいる。橋下大阪市長が「特に問題にすべきことではない」と、麻生氏の発言全体に対してコメントしたのは、こういう傾向から生まれたものであるうし、二段落にわたるナチスの例示を、第一段落の強調であると、各々を森として受取り、その中に入って木々まで詳しく吟味しなかったか、する必要も認めなかったということだろう。これも確かに一つの見方ではあるが、多くの人には森だけではなく、木も見えてしまうのである。

自ら言わんとすることのみをただ訥々と述べるだけでなく、相応しい発言量の、本体とびたりと呼吸を合わせた例示があれば、発言全体が引き締って聴衆の内容に対する理解が一層進むと同時に、その発言は美しく感じられるであろう。

これに照らして麻生氏の発言を考えると、どうなるであろうか。先ず、言わんとすることが第一段落とすれば、第二、第三段落は総てそれについての例示であるから、これは例示の肥大化と言われても仕方がない。これでは、どちらが本体かが分からなくなってしまう。次いで、例示したものが、本体の主旨を一層引き立てるものとなっているであろうか。必ずしもそうは言えない。と言うより、人によつては特別の臭いを感じて、それだけで不快感を催すであろう。極端な例を挙げよう。誰かが御飯を差し出す時、それが生まれる調理場の清潔さを述べようとして、「この御飯は便所からは遠く離れた調理場で炊いたもので蛆虫等は入っていません」と言ったとしよう。この発語全体から感じられるのは、炊きたてのあのほのかな香りと嘔むとしつとりと口内に満ちてくるあの甘みではない。全く異次元の臭みを伴う不衛生状態である。否定文を用いる場合最も注意しなければならないのは、否定文は肯定文を経由して生まれ、自ら言わんとすることが否定文によつて論理的には完璧に伝わったと胸をなでおろすのとはば並行して、聴き手の心象風景に、否定語を削除した文（肯定文）が影を落とすことだ。そしてその肯定文と否定文が奏でる二重奏の響きの良し悪しで、その発話の評価が決まる。

この点から麻生氏の場合を考えてみよう。どの戦後を考えても、終わった戦争を振り返る時の歴史観は、古今東西を通じて、戦勝側の歴史観に彩られる。しかし時が経てば敗戦側に対するシンパも徐々に出てきて、双方の考えを擦り合わせながら、比較的安定した「歴史」が定着していく。しかしナチスの場合、そういう経過は見られなかったと言っている。そして「ナチス」は、世界的に絶対悪の烙印を押されてしまった。従つて「ナチス」を引き合いに出す場合、人々の中に張り巡らせているナチスという地雷を踏まないように心しなければならぬ。それには一步一步に注意を払う必要がある。従つて「ナチス」を用いる時には片時たりとも、この言葉に評価を与えるような素振りを見せてはならない。それなのに第二段落の前半では、ヒトラー（ナチス）が合法的に世に出てきたこと（これは間違いないことだが）を述べて、絶対悪視されているナチスの片棒を担ぐようなことになっている。また第三段落には、「あの手口に学んだらどうかね」とある。これは麻生氏が最も無防備で発した言葉だろう。この部分だけから伝わってくるのは、「麻生氏はナチスを賞賛している」ということだ。先に述べた「地雷を踏まないように一步一步」とは、こういう隘路に知らぬ間に入り込まないように細心の注意を払う必要性に触れたのである。麻生氏は、口が曲つても、ナチスを賞賛することはないだろう。だが「ナチス」という地雷は様々な場面に潜んでいて顔を出す。先に「否定文は肯定文を経由する」と述べたが、この部分だけで考えれば、ナチスを否定する否定語はどこにも出てこない。否定語を伴つてもその論理的意味以外に肯定文の持っている臭みのようなものが感じられるのに、ここでは否定語はどこにもない。麻生氏は「ナチスの手口は使うな」と言うつもりなのに、それを肯定文のアイロニーで述べている。否定文を使うよりも、遥かに大きい地雷を踏むことになる可能性は大である。なるほど「あの手口」という言葉を用いてナチスに対する負のイメージは感じられるが、それを遙かに超えるナチスに対する正のイメージが、「学んだらどうかね」からは感じられる。以前と比べて、世界に於ける日本の役割は大きくなり、マスコミも飛躍的に発達した現在、この発言は国内のみならず海外にも迅速に伝達された。その際この「迅速」が問題である。この発言をどのような単語を用い、どのような形式の文に翻訳するのだが、迅速な伝達を宗とするマスコミにあって、発言の真意が正確に伝わるように慎重に翻訳されるだろうか——発言

全体を振り返った上での意識か、それとも無造作に肯定の勧誘文に置き換えるだけなのか（後者の方が物議を醸す可能性は高い）。更に「まなぶ」をどういう単語に置き換えるかも難しい。最も身近な外国語で国際語、英語では、どうであろうか。第一に思い浮かぶのは、Learn と study である。Learn が「知識として手に入れる」とか「勉強してそれに精通する」という意味であるのに対して、study は、「学ば（研究しよ）うと努力する」とか「注意深く観察する」という意味があるから、この場合は study を使った方が良さそうだ。「（手口を）知識として身に着ける」というより「（手口を）注意深く観察する」ととらえることにより、麻生氏の発言に対する誤解は軽減されるからだ。当然のことだが、study を使う場合、肯定の勧誘文にして、それが麻生氏の意図した通りに伝わるか否かは、天命を待つこととなる。別の考え方をしてみよう。日本語の「学ぶ」の語源は「まねぶ」即ち「真似する」で、日常的に使われる「学ぶ」の中にもその影を残していて、時折それが姿を見せることがある。それをここに当てはめると、「あの手口に学んだらどうかね」は「あの手口を真似したらどうかね」という風に聞こえてくる。日本人の場合ならこの程度のニュアンスを感じながら翻訳することもあるだろう。しかしこの場合 imitate や ape では、同じ「真似する」であっても、「ふざけ」のニュアンスが含まれるのでこれ等は避け、imitate や copy や follow を使うことになろう。しかしこれ等を使う場合、study を使う場合と異なり、否定の命令文を使う必要がある。肯定の勧誘文ではこれらの語を study に置き換えた場合より誤解を生む可能性が大だからである。

発言量をスマートに水増しすること、第一段落の主旨を更に鮮やかに印象づけること。麻生氏はこの二点を伝えたい為第二、第三段落を加えたものと思われるが、その目的を果たすことはできなかった。これが小中学生であれば「さもありません」で通り過ぎてしまっても構わないが、彼は総理大臣まで経験したベテラン政治家である。「言葉は政治家の生命」だから、彼がこういう言葉の隘路に迷い込むのは、政治家らしくない。そこで、それでは麻生氏は何故ナチスやヒトラーをこういう場面に呼び出したのだろうか。

手短かに言えば、一般の人々はワイマール憲法とヒトラーの関係を、次のように捉えていると、恐らく麻生氏は思っていたのだ。「民主主義を土台にして当時ヨーロッパで最も進んだワイマール憲法をヒトラーが強権で踏みじり、ナチス憲法を成立させて独裁政治を導き、ドイツ国内外の人々を恐怖に陥れた」と。だから何らかの機会にそうではないことを国民に示して、目から鱗を落としてやろうと機を窺っていた。そこにチャンスらしき「改憲論議」の場が与えられた。そこでここぞとその場を利用した。

第二段落でヒトラーが登場し、第三段落では歴史用語には無い「ナチス憲法」を比喩的（善意に解釈すれば）に用いたり、「あの手口に学んだらどうかね」と反語で述べて、麻生氏の高揚感が最高調に達する。正に、マンガやべらんめい言葉を好む麻生氏がその真骨頂を發揮した瞬間だ。同時に彼の頭の中では、多くの聴衆が目から鱗をぼろぼろ落としている筈の間でもあった。しかしその後すぐに「僕は民主主義を否定するつもりは全くありません」と述べ、例示で生まれた高揚感に既に水を差している。このあたりで麻生氏は、高揚感の余韻を心に残しながらも、自ら発した言葉の副作用を意識しながら、それへの対応に追われている。そのことが更に明らかになるのが、それに続く「しかし、重ねて言いますが、喧騒の中で決めないでほしい」だ。「しかし」は、「民主主義を否定するつもりは全くありません」に対する逆説の接続詞でないことは当然であろう。そうであれば、「民主主義を否定するつもりがある」ことになってしまふ。だとするとここはむしろ、「しかし」ではなく、「兎に角」や「いずれにしても」の方がいいだろう。それにも拘らず「しかし」が口を衝いて出たのは、恐らく、それまでの自分の発言の中に「喧騒の中で決めないで」という意味と相容れない表現があり、それが自ら言わんとすることに及ぼす悪影響の臭いを感じとったのではあるまいか。そしてそれが、「あの手口に学んだらどうかね。みんな納得してあの憲法が変わっているからね」ではあるまいか。この部分は聞き方によっては、自らの意志とは正反対の意味になる。このことに対する彼の懸念が、心理的には既にその部分を削除するよう彼を追い込んでいたが、それを実行する決断までには至らず、それが「しかし」となって現われたものと思われる。こうしてみると、思わず出した歴史的例示そのものが重荷となり、それを庇いながら進んで行く姿は実に痛々しい。だがその姿にこそ、「この例示によって国民の目から

鱗を落としてやろう」という野心の代償があるような気がしてならない。

それでは麻生氏のこうした「野心」は的を射ているのだろうか。結論的に言えば「否」である。

高校の世界史の教科書には、エーベルト大統領、ワイマール憲法、ベルサイユ体制、シュトレーゼマン首相、全権委任法、ナチスの一党独裁等に関する記述がある。更に教科書によつては、ナチスの台頭してきた頃のドイツ国民（庶民）のナチスに関する反応（支持側と批判側双方からの）が、生の声として示されているものもある。これだけの記述が教科書にあれば、高校の世界史の教師は少くとも麻生氏が触れたこと（これも氏の個人的見解だが）に直接触れる触れないに拘らず、この種の政治的雰囲気（それをどう解釈するかは個人によつて異なるが）を伝えることになるであろう。従つて高校で世界史を履修した人ならば、麻生氏が例示したあたりのことは、とりたてて氏が強調するまでのことではなく、大方の人は認識しているであろう。それどころか、氏の言う「ナチス憲法」なるものが存在しなかったことを逆に麻生氏は指摘されることになるかもしれない。いずれにしてもこの例示が多くの人々にとつて「目から鱗」などというものは、程遠いのである。

ところで、物議を醸した個所と離れても、氏の発言には理解しにくいところがある。それは正に、氏の言わんとすることの中心部分である「憲法はきちんと改正すべきだ」や「喧騒の中で（改憲を）決めないでほしい」についてである。これは、野党に対して言っているのだろうか。与党に対して言っているのだろうか。国会議員全体？あるいは国民に対して言っているのだろうか。

麻生氏は自民党所属の衆議院議員であると同時に、自民党副総裁である。その自民党は二度の国政選挙を経て、衆院、参院両院に於いて共に第一党になり、衆院では公明党と組んだ与党が過半数を超えている。この時点で国会に「改憲案」を提出した場合、自民党案の成立の可能性が最も高い（修正を伴つたにしても）。この場合野党の反対を数の力で押し切つて成立させようとすれば、当然国会の内外は喧騒を極めるであろう。憲法に手をつけることは、他の法律に手をつけるのとは異なり、それが国民に与える影響は極めて大きい。従つて自民党が改憲案を出す場合、自民党内で先ず原案を作つた上で、公明党とも充分に意見交換を行ない、与党案を作ることだ。そしてこの間のプロセスは国民の目に総て届くようにしてもらうことだ。そうすれば国民は初手から憲法論議に外野席から参加し、それに対する意識を高めることができる。その後野党との討論に於ても同様の形をとれば、国民投票の際には、質の高い一票を国民は投票することができる。国民が一票を投じるまでの国会議員の議論の進め方の肝要な点は、「拙速を慎む」ことである。それには正に麻生氏が言うように、静かな環境の中で冷静に議論しなければならない。そしてそれをリードしていかなければならないのが、第一党たる自民党であり、なかならず麻生氏等の果す役割は大きい。氏は財務大臣ではあるが、自民党の副総裁でもあるからだ。だからこの場合、「喧騒の中で決めないでほしい」という要望の対象は、実は自民党であり、麻生氏を含む自民党首脳部である。第一党たるものは自分の党や与党の立場に立つだけではなく、国民の立場を片時たりとも忘れず、野党と忍耐強く議論し、譲るべきは譲らなければならない。

改憲のような大きな問題に関しては、単に国会内のみならず国会外に於ても集会やシンポジウムが開かれ、各々の立場からの意志表明がある。野党も勿論だが、とりわけ自民党はインターネットを高くしてこれらを考慮しながら議論を進めると同時に、国会論戦に於てもそれらを意識しながら、受け入れられない場合には、彼等の主張を理解した上で、双方の隔たりから生ずる相手方の懸念をできるだけ払拭するように十分な説明を行うことである。こういうプロセスが国民に見えていれば、改憲に対する国民の意識は更に高まる。

「喧騒の中で決めない」というのは確かに一つの見識であるが、これがマイナスに機能することがある。あまり憲法に関する論議を表だってしないで、逃げるような試合運びで改憲をしてしまうことである。この場合は国民投票があるから民意は反映できるとも考えられるが、国民はそれまでずっと蚊帳の外に置かれていて突然決断を迫られることになり、一票の質はその分落ちることになる。今国会では、先の衆院選挙で自民党が選挙公約にも掲げなかった「秘密保護法の改正」が突如として浮上した。国民に大きな影響を与える法律であるにも拘らず、自民党より改正案が提出されると、あれよあれよと言う内に衆院を通過し、早く

も参院に送られた。この法案に関する国民の理解度を調べた各種世論調査を見る限り、それはとても低く出ている。これは、国民に充分その主旨を知らしめ、様々な疑問に明確に答えてこなかった与党、特に自民党の姿勢が問われよう。皮肉なことに「喧騒の中で決めない」ことの中にも、大きな問題が潜んでいるのである。

さて、麻生氏は、このようにみていると、あの場面ではじつと堪えて、言いたいことは胸の奥にしまっておいた方が良かった。そして憲法改正を目指す際、それを時々思い出しながら、国会内で充分審議ができるように、また一般国民にはその主旨が充分理解できるように、粉骨碎身してもらった方が良かった。だが、それは今からでも決して遅くはない。物議を醸した今回の発言の罪滅しとして、憲法論議への望ましい環境作りに、黙って一肌脱いで欲しい。

政治家は、力強い言葉で国民を導く場合もある。しかし、黙って導く場合もあっていい。その両面を一人の政治家が持ち、各々をタイムリーに駆使する時、その政治家に深みが出てくるのである。

緑の稲田を渡ってくる風は微かに湿っていた。六月の半ばを過ぎても湿り気を帯びているのは、やはり兵庫県北部の但馬地方の風だった。その風を受けながら、ふるさとの田舎道を歩くのは何十年ぶりだろう。勤めの身なので、近年はここへ帰ることはあっても、墓参や寺の用件を済ますとすぐに島田市へ戻っていたのだが、今回は今夜の小中学校時代の同級会——小中学校ともに同じ顔ぶれで二学級だった——に参加するために昨日から帰っている。しばしば開かれてきた同級会だが、今年で皆々六十七歳になる。会場に出かけるまでの暫くの間、地元にいる同級生の敦子さんの案内で、眠ったように静かな午後の道を歩いている。

敦子さんの家から三軒目が私の家だったが、その敷地は他人に渡り、そこに新しい家が建つてから二十年近くなる。敷地の隅に我が家を偲ばせる茗荷の繁みがある。秋口になると繁みをかき分けて、蝶のような白い花をつけた茗荷を採ったものだったが。

その前の家は雨戸が閉まったままだ。戦争で夫を失った小母さんが、遠い温泉旅館へ通いながら二人の兄妹を育てていた家だ。

——小母さんも亡くなりなつて（亡くなつて）、息子も帰つて来んのでずっと空き家のままなんよ。

地区に一軒だけあつた雑貨屋には男の子が三人いたが……。

——一級上の人は亡くなつたし、第二人は神戸へ出たままなんや。

ガラス戸から覗いている色褪せたカーテンのたるみが、閉め切つて長い時間のたつたことを語っていた。

子どもの頃、鮎やウグイを釣つた谷川の橋にさしかかると、せせらぎの音が意外に大きく響いていた。川下には昔のままに稲田の緑が連なっている。

——あつちもこつちも独り暮らしの人が多いんやで。

そう話す敦子さんも数年前に夫を亡くしたのだが、すぐ近くに娘の家族がいるので孫を見たり食事を一緒にしたりしていると言う。敦子さんは、幼いときに父と死別し、母と二人の暮らしだった。その母を夫の亡くなる三年前に見送り、地元で足を付けて地域の世話役も果たしている。ふるさとを離れた私と違つて敦子さんが立派に見える。

橋を渡ると、記憶に残っている家々が、一部新しくなつたりアルミサッシの戸に変わったりにしている。

——林先生も独りなんよ。ご主人を亡くされて五年ほどになるかなあ。確か八十四歳やと思う。

林茂子先生——。私たちが小学校にあがるときだったか、私たちの学校の先生になられた。受け持ってもらつたことはなかったが、家も近かつたので先生とは毎日のように顔を合せていた。学校でも地域でも、先生は会う度に私の名前を呼んで頬笑みかけてくださった。そのたびに私は、先生の頬笑みの中に包み込まれ、一瞬の仕合わせを味わつた。

——娘さんが隣の町に嫁いでおつてやで、ちよこちよこ来とつて（来ていて）や。

林先生のお宅は、昔ながらの格子戸が時代から身を守るように残されている。敦子さんは自分の家にも入るように玄関から声をかけながら入つていった。

——おいでた（いらつしやつた）よ。

手招きする敦子さんに促されて家の中に入った途端、大きな驚きの声をあげながら林先生が奥の間から出て来られた。髪は白くなられたがああ頃の笑顔そのままに私の名前を呼んで、両の手で私の手を包まれた。

——何年ぶりかいな。高校生のときには見かけとつたけど……。

——その頃からなら五十年近くあります。

——そんなに。小さいときのあなたをよう覚えとるんよ。腕白坊主で、なあ。

同意を求められた敦子さんが笑っている。

——私、あなたに謝つておかな（おかないと）あかんことがあるわ。ずっと前に静岡のお茶を留守の間にいただいて、そのままにしてしまつてごめんなさい。

そう言われて、おぼろげな記憶が甦ってきたが、それはもう三十年あまりも前のことだ。先生は律気にそんな昔のことを覚えておられたのか……。私は小学生の頃のことを話した。

——先生がこのお宅で花嫁になられたときの姿、覚えてますよ。

先生はお婿さんを迎えられたときのことを一しきり話された。当時、地区で結婚をする家があると子どもたちは遠慮もなく嫁さん姿や婿さん姿を見に行ったのだった。私の近況についても尋ねられるままに話した。こうして上がり口で、小学生の頃に聞いた林先生の声を五十年ぶりに聞いているうちに私はいっしょか小学生に戻っていた。

連絡もせず突然伺った非を詫びて立ち上がった私に、先生は顔いっぱい笑みを湛えて小首を傾げられた。

——とつても、とつても嬉しかったわ。生きとつたらこんな嬉しいこともあるんやなあ。

敦子さんが、私のカメラで上がり口に並んで腰掛けた先生と私を撮ってくれた。外まで見送ってくださいった先生は、子どもを諭すように言われた。

——忙しそうな身やから無理したらあかんで。ようよう（よくよく）氣いつけてな。

先生の息吹きは快い旋律となって胸に染み込んだ。

林先生の家を後にして、また暫く敦子さんの案内に従って、過ぎし日を偲びながら歩いてきたが、今しがたの先生との再会が、私の内に果物の香りのような余韻を広げていた。

同級会を楽しんだ翌日、島田市に帰った私は早速写真をプリントアウトした。先生と写っている写真が二枚あった。一枚は二人とも澄ました顔だが、もう一枚は私が先生の肩に手を置き、先生も笑顔がこぼれている。お札の手紙と共に二枚の写真を送った。

先生からはすぐに葉書きが届いた。小さな優しい文字が並んでおり、一久々に胸がときめいたと敦子さんに話しました——とも認めてあった。

盆月になって、先生に暑さを見舞う電話を掛けた。ふるさとの言葉で話される先生の声は、私が子どもの頃に聞いたままの響きを帯びていた。

——あの写真、ときどき眺めとるの。あなたがそばにいてくれるようで嬉しいわ。

先生の独りの日々、わずかでも慰めとなれば私も嬉しかった。

——暑いときですから、お盆の仕度もゆっくりとしてください。

——もう思うように動けんようになったわ。電話、長うなつてもかまへん（構わない）か。先生はそう断ってから話された。

——お盆には息子も祀らんといけんの。一人息子やっただけど、四十六歳で亡くなったの。もう十年目のお盆です。辛うて辛うて、立ち上がれなんだ（なかった）わ。その後に主人も亡くなって……。最近になつて漸く落ち着いてきたの。

.....

——息子は神戸に住んでたんや。友だちと川へ遊びに行つとつてね、深みに入って溺れた友だちを助けに行つて、息子も溺れてしまったんです。

先生の明るい頬笑みの陰に、そんなにも深い悲しみが隠されていたとは——。

——息子に似て魚釣りの好きな二人の孫たちが、お盆には来てくれると思います。

先生は人生の悲苦を超えられた後の、木洩れ日のような頬笑みを湛えておられるのだ。

——それからな、私、あなたに悪かったなあと思つとることがあるの。

.....

——私の最初の子ども、流産してしまつて。診療所から帰るとき坂道であなたに会つたけど、私、何も言えなかつたんよ。流産のショックがあまりにも大きゆうて。

遠くから打ち寄せて来る波のように、一齣の光景が甦つて来た。私が小学校の三年生か四年生のときだった。家の前の小高い所にある診療所の坂道を、珍しく着物を着た林先生がくだつて来られた。先生はいつものように小首を傾げて頬笑んでくださった。なぜかその光景は私の記憶に鮮明に残っている。先生もまた、その瞬間を今もつて覚えておられる。何と不思議な記憶の共通項——。

——何も言つてあげられなだこと、ずっと悔やまれてなあ。

——そうでしたか……。長い間気にかけていただいて……。有り難とうございます。

あの頃、両親不在の私が父方の祖父母に育てられていた事情を、近所に住む林先生は知っていて、それで声を掛けてくださったのではなかったか——。父は病死し母は実家に帰つてい

た事情など、当時の私は知る由もなかった。

深い淵とその淵に差し込む光を覗き込んだような電話のあとで、改めて写真を眺めてみた。にこやかな表情で写っている林先生からは、もつともつと懐かしいあれこれを、温かい声で話してもらえそうな気がした。

我がふるさととは寂れた。が、緑の稲田を吹く風や谷川のせせらぎが、林先生の声とともにふるさとの声となって、この写真から伝わって来るようだった――。

(丁)

七月二十一日、山口県周南市で、五人の遺体が見つかった連続放火事件があり、逃走していた容疑者は二十六日、警察に身柄を拘束された。次にあるのは、二十七日の読売新聞朝刊の「編集手帳」である。

◆生まれ育った土地を離れて暮らし、再び故郷の土地を踏んだ経験のある人はうなずくだろう。「忘れたふりを装いながらも／靴をぬぐ場所があけてあるふるさと……。」中島みゆきさんの歌った『異国』にある◆その人物にもかつては、〈靴をぬぐ場所〉があつたようである。山口県周南市金峰の民家4軒から男女計5人の遺体が見つかった殺人・放火事件で、同じ集落に住む保見光成容疑者(63)が殺人などの疑いで逮捕された◆10年前、過疎に負けずに生きる金峰地区の人々を取材した『続・さくら色の夢』と題する記事を本紙の西部版で連載したことがある。工務店の仕事をやめて川崎市からUターンした保見容疑者も、実名で登場している◆老母の介護でおしめを換え、たんを取っていた評判の孝行息子はいつしか、奇矯な言動で近隣在民とトラブルの絶えない問題多き人物になっていたらしい◆歌詞にある〈靴をぬぐ場所〉は、集落の人々が寄り合つて語らう囲炉裏わきの土間であつたはずである。近くの山中で警察に身柄を拘束されたとき、保見容疑者は裸足であつたという。靴をどこで脱ぎ間違えのだろう。

この欄の担当者は、時事問題を的確な引用を用いて問題の本質を鋭くえぐり出すだけでなく、その引用によつて、読者に柔らかく仄かな余韻を残していくのである。

この欄の毎日の構成はほぼ決まっている。冒頭にテーマに関連した引用がある。それが終ると、扱うテーマに欠かせない事実を極めて簡潔に述べる。そして引用したものとこのテーマの接点を求めながら、最後にテーマを振り返り、引用したものを効果的に用いてコラムを閉じるのである。文字にして三百二十字程度に過ぎない。

引用したものを効果的に用いてコラムを締めくくるには、豊富な材料を持つていなければならぬ。実際このコラムニストが引用してくる材料は、古今東西の文学、歴史、哲学や、大衆芸能(映画、落語、流行歌等)、逸話、名言、格言等、挙げていけば際がない。その上で、その中からテーマに相応しい材料を取り出すのには、鋭い感性がなければならぬ。更に限られた文字数でテーマを扱う表現力が必要である。これを毎日書き続けるのは並大抵のことではあるまい。私は毎朝「編集手帳」を読む度に、感心している。

そういう彼にだつて思うようにいかない時がある。例えば三・一一津波の時だ。発生直後もそれ以後も、次々と新たに筆舌に尽くし難い事態が発生した時それをこの手法で表わそうとすると、どうしても事態の進展の速さに表現が遅れをとり、引用を伴う表現にディレクターテイズムの臭いを感じてしまうことがあつた。しかしこの時期には、現実の厳しさに一流の物書きだつてそのほとんどが一時的には筆を折っていた。筆舌に尽くし難いから筆を折つたのだ。しかし「編集手帳」を休む訳にはいかないから彼は書き続けた。厳しい巨大な現実を前にすると、書くことの無力さを誰しも経験するものだが、それでも彼は書かなければならなかつたのである。

本コラムでも、「五人も死者を出しているのに『異国』を引用するとは、道草を楽しんでいる！」と思う人が、ひよつとするといるかもしれない。そしてそれも一つの見方かもしれない。しかし私はそういう見方はしない。この事件は単なる放火・殺人事件ではなく、その背後に、容疑者Uターン後の親孝行からの悲しい変身、それを後押しする社会の構造問題があるからである。コラムニストの引用は、こうした問題を暗示していて、的確だ。

ここでは、中島みゆきの「異国」の一節を引用している。この曲は非常に長くて六番まであり、引用されたのはその中の四番だ。因みに四番全体を示せば

悪口ひとつも自慢のように

ふるさとの話はあたたかい

忘れたふりを装いながらも

靴をぬぐ場所があけてある

ふるさと

である。この曲の四番以外の歌詞は総てふるさとを、自ら寄りつか(け)ない又は自らを招いてくれない存在として、暗いマイナスイメージで表現されているのに対し、この四番だけが、突如として日が顔を出したような明るさを放っている。

経済の高度成長時代には、若者達は競うように大都市圏に吸い込まれていった。故郷に仕事がないという理由以外にも、都会への憧れや周囲の仲間へ乗り遅れまいとする気持、更にはもつと明確な目標——立身出世を夢見る思い等をもって、若者達は故郷を離れたのである。その後仕事にも遊びにも忙しく、故郷を思い出す余裕もなく、またそうすることがどこことなく垢抜けないと感じる時さえあった。都会の生活もある程度軌道に乗り、故郷の両親や親族が健康な毎日を送っている内は、知らぬ間に時が流れていく。しかし両親が老いたり、たとえ両親が老いずとも、仕事が順調にいかなくなったり、自分の生き方に疑問を感じたりする時、人はふと振り返って自分を見詰め、そこから故郷を遠望するものだ。すると疎遠にしていた故郷は、それ故に、一方では遠く遙かな所にあつて近寄り難いものを感じながらも、他方に於いて、心の空白をそつと癒やしてくれそうな気がして、知らず知らずの内に引き寄せられていきそうな存在でもある。

五十歳前後になつて都会からUターンしてきた当時の気持が、どのようなものであつたか知る由もない。だがUターン後は老母のおしめを換え、たんを取つていた親孝行息子だつたというから、老母の介護が本人の生きがいであり救いだつたのかもしれない。しかしやがて両親を失うと、両親が故郷で築いてきた周辺の人達との人間関係が徐々に薄れていき、Uターンをする人の少ないこの部落にあつて同世代に知人、友人のいないこの息子は徐々に孤立し、心を閉ざしていく。そういう心の中で生まれる不安、更に進んだ苛立ちがこの事件の背後にあることは充分考えられる。

容疑者は故郷を後にした時何を考えていたのだろうか。都会の生活をどのように送つていたのであるか。またUターンした時の決意は、どのようなものであつたのか。

故郷は常に微笑んではくれない。故郷の空模様は、それを受け入れる側の心の有り様によつて、大きく変わっていくものだ。「異国」の中で唯一「晴れ模様」のこの場面をコラムニストが引用したのは、容疑者にも一時期は故郷と蜜月関係にあり、故郷で明るく前向きに生きていた頃もあつたことを浮彫りにしたかったのであろう。

このコラムニストも先ず私達と同様に、この事件の核心——五人の殺害と放火——に衝撃を受けなければならない。しかし同時に二つの新聞記事で、今回容疑者が四日後に身柄を拘束された時裸足であつたことを強く意識し、十年前老母介護の為Uターンしてきた記事を覚えていたか調べておくしなければならぬ。そして単にそれを頭ではなく心で受け止めなければならぬ。この時自らの心模様をじつと見詰めていると、これに似た模様をいつか見たことがあると感じられてくる。するとそれまで星雲状態だったものの中から、ひと際強い輝きをした星が近づいてくる。それがメロディーを背負つた「異国」だつたのだろう。そこで微かに知つていても大方忘れてしまつていたにしても、その歌詞は後からだつて調べようと思えば充分可能だ。その時この事件にまつわる歌詞の一部を取り出せばいい。もつともこのコラムニストは言葉に対する感性がとても鋭いから、この歌詞の中のこの一節を、メロディーや歌詞全体よりも、特徴のある言葉として気に留めていたのかもしれない。いずれにせよ、ここで「靴」と「ふるさと」が登場してくる。それは現実の世界の「裸足」、「Uターン」と息がびつたりと合っている。そしてこれら四つを素材として並べてみると、この事件を遠巻きにしながらも、却つてその本質に迫つてるように彼自身にも思えてくる。このようにして生まれたのが、今回のこのコラムだつたのではあるまいか。

最後の段落は実に鮮やかだ。靴を脱ぐ場所として「土間」を、そしてそこを上つた所に囲炉裏を配置して、ハード面でのお膳立ては出来る。ひと昔前の人達は、ここで履物を脱いで囲炉裏の火を囲み、語らい、多少の息苦しさは感じつつも、濃密で安定した人間関係を育んできたはずだ。こういう場所を示しておいて突如として山中で裸足で発見された容疑者が登場する。アンティクライマックスである。「靴をどこで脱ぎ間違えたのだろう」は、容疑者本人には勿論のことその背後には、彼を囲む部落の人達、そしてひいては日本全体に投げかけられた問題であることを暗に示している。

私はここまで約四千文字近くを浪費してきたが、このコラムニストはその十分の一以下の文字で、私以上の内容に触れている。こういうコラムを毎日必ず一本書くことは、改めて驚くべきことと言わなければならない。

昔、昭和四十年の初め頃だったろうか、テレビで「飢餓海峡」という映画を見た。三国連太郎と中村玉緒が共演していたと覚えている。女は青森から上京する時車窓から身を乗り出し見送りの人に「東京に出て心はここに置いていくよ」と叫んでいた。あれから五十年近くなるがあの場面だけは消えていかない。

このようなことを書き始めるのは次に私の郷友Kのことを書きたいからである。Kはあの女と同じようにふるさとに心を残して上京しそこで働き高度経済成長の浮沈に翻弄され今は病いに伏せつついる。私は彼を思うときまってあの女の叫んだ言葉、「東京に出て心はここに置いていくよ」を思い出すのだ。

Kは高校卒業後上京して最初は町工場で働いていたが高度経済成長の波に乗って独立し一時は仕事も順調でそれはずいぶんと羽振りがよかったものだ。夜遅く電話があつて長々と仕事の自慢話をするので家内が起きて椅子を持ってきたり衣服をかけたりにしてくれた。Kは飲み屋から帰ってきて上気嫌で話しているのだからたまつたものではない。最後は、こまつは明日仕事があるんだっけなと思ひ出したように電話を切るのだった。うとましくも懐かしい電話だった。

Kは仕事を終えてから故郷の新庄に出かけ駅前飲み屋で一夜を明かすこともあつたという。三時間余をかけて行くのだからよほどそこで飲みたかつたのだろう。

Kは自分の成功を同郷人に見てもらいたかつたのだ。たいしたもんだと認めてもらいたかつたのだ。私も一度彼の工場を見せてもらったが従業員二十人ほどの流し台や風呂のバスを製造している工場で郷里から数人の出稼ぎ人が来ていた。彼はそこでは成功者なのだ。故郷に錦を飾っているのだ。彼はそれが嬉しかつたのだ。

Kは同級生をこと更大切にした。私が家を新築する時に流し台と風呂のバスを祝いとして運んできてくれた。最初その話を棟梁にしたら半信半疑だった。そんな高価なものを、それも遠い浦和からと思つたのだろう。車で運ばれてきた現品を見て、こまつさんはいい友だちを持つてるなど驚いた。たかが友だち、されど友だちということがその時まで信じられなかつたのだろう。

こんなこともあつた。年末の昼過ぎに電話がきて今すぐに来いという。仲間が集まるからこまつも来てくれというのだ。しょうがないので出かけたが夫婦連れで数人が待ちかまえていた。餅をつき田舎料理をふるまって歓待してくれた。その時の彼の嬉しそうな顔を忘れられない。彼は真底から嬉しかつたのだ。帰る時ポケットに電車賃だと札を突っこんだ。電車賃にしては余るものだった。

Kはそれを恩がましくはやらなかつた。こまつには世話になつたからと酔うと口にしていたがどんな世話だつたか覚えていない。

こまつをハワイに連れていってやるからなとも言つていた。あの頃のハワイは庶民の手の届く旅行先ではなかつた。これは実現しなかつた。その前に不景気になつてしまつたのだ。彼はそれに翻弄されてなす術はなかつた。あの時のバブルは蜃気楼だつたのだ。そう気がついた時には彼のふるさと、新庄もすっかり変貌していた。米作中心だつたかつての農村は減反政策で元気をなくして旧家は落ちぶれていた。菊は栄える葵は枯れる。だが葵は枯れても栄える菊はごく僅か。新庄はそんな町だった。彼には帰っていける場所はなくなつていた。

ここで私は先に引用した「飢餓海峡」の女の言葉を思い出す。「東京に行つても心はここに置いていくよ」。あの女はふるさととは変わらぬものと信じていた。それだからあのように絶叫できたのだ。あの女は望郷の女だった。ふるさととは遠く離れていても確かな実在する土地だつたのだから。

それではKの心境はどうだつたのだろう。あの女よりももっと複雑だつたのではないか。そういえば飲み騒いでいる時Kは千昌夫の歌をこんな風にうたつていた。「ふるさとへ帰ろかな 帰れない」。勿論、元歌は「ふるさとへ帰ろかな 帰ろかな」である。それなら文句なしに望郷の歌だろう。帰ろうとすれば帰れるふるさとがあるのだから。それは唱歌「ふるさと」の世界でもある。そこでは山も川も人も村も昔のままに健在なのだ。

しかしKのふるさととはとつくに不在なのであり帰ろうとしても帰るところがなくなつて

いたのだ。たとえ帰ってもそこは異郷。Kにはそれがわかっていて。

所詮、俺は庄衛門（彼の実家の屋号）の次男坊、そこへ今更戻れはしない。この思いは昭和二十年代に上京した私たちならだれでもひそかに共有していたのではなかったか。それだからこそ「ふるさととは遠きにありて思うもの／そして悲しくうたふもの」に強く共感したのではないか。

だがそのような悲しみを和らげるのの一つ抜け道がある。それは成功者となることだ。そうすれば故郷に錦を飾ることができそれとつながることもできる。たとえそれが一時的表層的であってもだ。それができなければ彼の望郷は忘郷となるだろう。棄郷となるだろう。最後には「よしやうらぶれて異土の乞食となるとても帰るところにあるまじや」となるだろう。Kにはそのことがわかっていて。それだからこのままになってしまふことを恐れた。Kは強そうで弱い男だった。弱いというよりもろい男だった。順調な時にはそれでもよかったがひとたび海が荒れ潮目が変わるとそれを乗り切れなかった。

Kは涙もろかった。友人の葬式の時棺の中を覗き込んで泣きながら何か話しかけていた。私は側でただ見ているだけだった。そんな時には泣けてもこないし涙も出てこないのだ。妙にさめてしまうのだ。そのくせあとになって変な時にこみ上げてきて抑えられなくなってしまう。Kは自分の気持に正直だった。

バブルがはじけると電話も少なくなつた。それでも思い出したようにたまにかかってきたが金策でひどく苦労しているようだった。取り引き先の銀行のあくどさをずいぶんと批難していたが銀行としてはあたりまえのことをしているだけだったろう。以前なら、俺のところには審査なしで金を借してくれると自慢していたがそれが一変したのだ。

その頃から精神状態は不安定になってきたようだった。弁護士をしている高校の先輩の電話番号を教えてくれと突然電話があったが、そのあとすぐに教えないでくれと奥さんから連絡があった。法外な報酬を要求されるかもしれないからとのことだった。

それから半年ほどして昔の仲間と訪ねた時は意識ははっきりしていたが話すのがやつとのことだった。帰る際に顔を寄せて又来るからなと言おうとすら涙を浮かべていた。これが最後になるだろうなと思った。帰りの電車で一緒の連れが、Kは女が好きだったからなと言った。こんな顔して俺は女にもてる筈はないよと笑っていたKを思い出して可笑しかった。

Kは今寝たきりになって自宅で奥さんが世話をしている。もう四年ほどになる。本人との電話での話は最初のうちはできたが今は無理だ。ハガキを出すと奥さんが返事をくれたが今はそれもこなくなつた。奥さんはえらいなと思ひ出しては家内と噂している。

私は毎日が日曜日の生活なので家でぶらぶらしているが今日は引き出しの奥に大下八郎のうたう「女の宿」のラジカセを見つけた。Kの好きな歌だった。

たとえひと汽車遅れても

すぐに別れは来るものを

わざと遅らす時計の針は

女ごころの悲しさよ

Kはこの歌を箸で茶碗を叩きながらうたっていた。長南という男が顔が大下八郎とそっくりで歌も上手だった。長南、うたえよとせかして一緒にうたっていた。どんな思いでうたっていたのだらう。ただ気分がよくてうたっていたのだらうが今こうして聞いているといろいろな思いがこみ上げてくる。あの歌のうまかった長南はとくに死んでしまつて、Kも寝たきりになってしまつて私は体調を案じながらその日その日をなんとか過している。

伊豆の夜雨を湯舟で聞けば

明日の別れが辛くなる

明日の別れなんか辛くはならないよ。ひと汽車遅れて行くだけだもの。ここでの出会いはあちらでの出会い。人はたくさんの出会いをしてあの世へ行く。ここでいい出会いをしていればあの世でもいい出会いができるのだ。これは私の勝手な想像、強がりである。強がらないでどうしてあの世へ旅立てよう。あの世がなくてどうしてこの世の老いの寂寥を耐えていかれよう。

これも又私の強弁である。そんなものがなくてもなんの不安もなく生きてる人をたくさん知っている。私がそんなに強くはないだけだ。もっとも私がこんな気持になつてきたのは最

近のことである。身近かな者が次々とあちらへ行ってしまうってそれきりである。そのあたりまえのことがわからなくなってきたのだ。帰ることのない出発とは何だろう。それは出発ではなく絶対的終焉である。それが生の実相なのだ。この不条理を解消するには人はそれぞれ固有の死生観を考え出すしかない。

この頃は死んだ人が身近かになってきたよと言ったら、そんなことを言うなんてどこか変よと家内に注意された。そうかもしれない。私が時折軽い眩暈に襲われるのもそのせいかもしれない。

Kよ、私は今眩暈の中でお前を思っている。「女の宿」を聞いている。お前の声ははっきり聞えてくるのだ。

第五部 文芸

小説

審査員 静岡県立下田高等学校 山口 哲

【総評】

「文学の香りが遠のく世情」（ロシア文学者田中泰子氏）を反映してか、応募作品が二点と寂しいが、一読、人間とはこんなに面白いのだ、滑稽なのだ、愛らしいのだと言葉を紡いだ作者たちの営為が嬉しくなった。「クラコウジア！」はて？いや、これは映画『ターミナル』（スピルバーグ監督）に登場する架空の国名なのだが、ひとつ大胆な発想の下、大いに楽しい作品の数々を生み出してほしい。

「ぼくの日記から」 ぼくとぼくに関わる人々の心情や関わり方をもう少し丁寧に書き込めるとよかった。

優秀賞 黒楽茶碗

大 重 晴 美 浜松市立佐藤小学校

吾助は呉服屋の使用人。六十近いのに手代にもなれず、体の衰えを感じている。仕事をさぼることも多かった。その吾助が主人吉兵衛の「特命」を受けるのだ。女中のお幸、亡き先代、吉兵衛の内儀お高、遊び人風情の若い男、和尚などが活き活きと吾助に絡み、木箱や小判、着物、菅笠、団子といった小道具が味わい深く話を引き立てる。吾助は「特命」を果たせるのか。結末やいかに。

詩

審査員 日本現代詩人会会員 池上耶素子

【総評】

歌人であり詩人である岡井隆はその著書のなかで、「私は与えられた機会をとらえて、小さな現実の出来事を詩にしていた」と書く。

本年度の応募作品六編は、紛いもなく現実の事柄に詩作の機会を与えられて生まれた作品群であった。詩人一人ひとりの日常の在りどころを見つめ、何度か読み返し、結局、生と死を見つめた詩、次の二編となった。

優秀賞 理由

小 松 忠 退職互助部（小笠）

世を去った友人への言葉か。巷に流れるうわさ話に機会を与えられた、生と死に真向かい生まれた詩。死んでいく理由。生きていく理由。それは人間であることにつきるという重いテーマを、終連で「こんなたわいもない言葉遊びをしながら」とユーモアに転換して、二つの世界を結ぶ。残る人生は「願わくば言葉が言葉を食べるような」、遊びと楽しみに満ちたものであれという祈りが素直に伝わる詩。終連のユーモアが、詩の世界に厚みを与えた。

佳 作 雷雨の夜、亡夫を偲びて

袴 田 毬 子 退職互助部（志太）

古から繰り返し詠われたつま恋の歌。男と女の愛の詩。突然の雷が呼び寄せた亡き夫への思い。支えられてきた日々への追憶。繰り返される「詮無いことと、知りながら、」という詩句が、残された女の淋しさを増幅して切ない。

ただ、標題の「亡夫を偲びて」という文言は説明的。「雷雨の夜」と言い切るのはどうだろう。その方がイメージの結晶度が高められるように思うのだが。

童話・童謡

審査員 静岡県伊豆文学フェスティバル委員 中尾 勇

【総評】

今回の作品は生活上のさりげない心のこもった作品揃いで心が大変うるおった。県下の教職員の人々の考えが、貴重で大切な思いにみちみちている事に心うれしかった。

優秀賞 親子クジラの旅

坂 部 哲 之 退職互助部（磐周）

子どものクジラの生命を育てるべきと母クジラは南の海からベーリング海峡まで子どもを泳ぎでまもります。シャチの群れに生命をとられかかりますが、クククジラな

どに助けられます。その母子の交流が美しいので魅了されます。

佳作 昆虫会議

中村 肇 退職互助部（榛原）

人間は生まれながらに「生・病」に悲しんでいる。私たち昆虫は、ニンゲンて一体幸せなのかと、「何のために生きているの」と疑問にもつことがありますね。と昆虫の疑問は続いている。

佳作 「鈍亀（どんがめ）街道」

渡辺 忠 栄 退職互助部（沼津）

村の財産の街道づくり。一方は北地区の亀太郎、一方は南地区の兎吉。北地区は亀太郎のおかげで台風でも大丈夫だった。この街道を鈍亀街道として村の人達は大切にしている。

佳作 小さな菊

長崎 良 夫

東部特別支援学校伊豆高原分校

もらえなかった入学願書

長崎 智 子

東部特別支援学校伊豆松崎分校

評論・書評

審査員 一般社団法人静岡県出版文化会 大庭 敏彦

【総評】

応募作品は、評論四点、書評一点の五点。それぞれ筆者の真摯な思いが表出された力作である。論じている観点はそれぞれだが、その根底を支えているのは、日本の、日本人の高尚な「道徳心」「良心」というアイデンティティーを喚起させる思いである。

優秀賞 筆致は平明・優しい語り口調

佐吉の幼・少年期に恣意からの創作の筆跡

高柳 幸 夫 退職互助部（湖西）

筆者がライフワークとしている、郷土の偉人「豊田佐吉」の伝記物語を高い見識と調査で「伝記・評伝」と「物語」の相違を精査した力作である。子供たちに分かり易く平明な文章を賞賛しながらも、事実を追究し、史実に基づいた正しい偉人像を伝えたいという筆者の執念にも似た思いが伝わってくる。

佳作 政治家の言葉

竹本 公一 退職互助部（駿東）

「改憲」という日本の抱える今日的な政治課題を、一政治家の発言を取り上げ、論述していきながら、そこに自らの論旨を展開する筆者の明快で小気味よい文章である。主権在民と言いながら、政治に無関心な層が広がっている昨今、改めて政治に眼を向けさせる提言は貴重である。

随想

審査員 一般社団法人静岡県出版文化会 大庭 敏彦

【総評】

現職教職員の応募はなかったが、応募作品は昨年と同数の十一点あった。

自分の来し方を回想し、家族や友人との関わりを時間の流れと共に追ったり、印象的な一齣を切り取ったりして表現した作品、現代の世相を鋭く切り込み、日本が失ってしまったものを表出した作品など、いずれも人生の年輪を重ねた筆者が書き上げた、読み応えのある作品群で、審査に大変苦慮した。

優秀賞 「ふるさとの声」

松田 宏 退職互助部（志太）

遠く離れ、寂れてしまった「ふるさと」が、懐かしい同級生や年老いた恩師のふるさと訛りの声とともに甦り、筆者を言いようがない温かさや郷愁で包み込む。洗練された優しい文章を読み進めると、緑の稲田の広がる田舎の道、日本の原風景を背景にした映画を見たような読後感が心地よかった。

佳作 放火殺人事件と「編集手帳」 竹本 公一 退職互助部（駿東）

「靴をどこで脱ぎ間違えたのだろう」殺人事件を取り上げた新聞のコラムの一行に着目し書き進める筆者の巧みな文章から、現代の日本が抱える問題を示唆された。一貫して、コラムニストの卓越した力量を素直に認める筆者の潔い姿勢に、まだまだ若々しい伸びしろと可能性を感じる。

佳作 眩暈 小松 忠 退職互助部（小笠）

人生の晩年を迎える時、人は何を思うだろう。旧友Kの生き方を通して、筆者の人生観、死生観が垣間見える。昔見た映画の一場面と旧友Kを重ねる書き出しなど構成に工夫が見られる。

短歌 静岡県歌人協会会員・「ある」短歌会」編集同人 草間 健

優秀賞 天心より咲きなだれる夜ざくらの精に圧さるるごと立ちつくす

満開の向かうはふかき闇ならむ彼の世この世を結ぶ夜ざくら 秋山 尚子
一首目は二句に桜の生態を的確にとらえ、木の魂に圧倒される心情が結句に収斂された。
二首目は満開の現象（諸法）の真実（実相）を詠み、見えない闇の生命の営みの相の洞察が優れている。

佳作 炭焼きの白煙青に変わりゆく木酢漂う三夜の火の番 佐藤佐和子

炭焼きの実態をリアルに描写している。

佳作 産声にはたと顔上ぐ待合の家族等みな笑顔はじける 坂口 歳雄
新しい生命の誕生の喜びの瞬間を捉えた。

佳作 汗垂らし防空頭巾を被りたる夢より覚めて八月のゆく 伊藤 正則
戦中体験を通し不安な世相を暗示している。

その他 一打数一儀打残る記録表補欠の球児バットを置きぬ 安藤 勝志
雷雨止み樋より流る水の音爽やかに聞こゆ朝のひととき 袴田 穂子
廃校の校舎の解体始まりて貰はれてゆく校歌の譜面 野村 久
転任の我を見送る子らの声谷を隔ててまだ聞こえくる 藤田 一男
古民家の軒に置かるる石うすに祖母と豆挽くあの日の戻る 鈴木 智子
富士よりの涌く真清水を両の掌に掬ひ大空映し飲み干す 高杉 光昭
今もお水俣病の根深さに『苦海浄土』をまたも手にとる 鈴木 道昭

俳句 俳句結社「万象」同人・静岡市民俳句大会選者 曾根 満

【総評】 応募者数二十七名、現職教職員五名はさみしい。応募句に解説を付すことは避けたい。

優秀賞 冬帽子目深にかぶり鬼を待つ

赤鬼を囃したてたる霜夜かな

赤鬼の還りゆくなり枯木山

村松 達也

「奥三河花祭」と題する作品。民俗行事は俳人の好むところ。それだけに差別化が難しい。その花祭を一連の流れ（ストーリー）としての五句にまとめた力量は確か。その確かさは、主観に走らず写生に徹し生まれた。

また、季語の幹旋も偏りが無い。特に、二句目は花祭の賑わいと厳しい寒さを「囃したて」「霜夜」で表出。

新人賞 廃校の石垣高し秋の風

幾千の紅葉の中の阿弥陀かな

ジェット機や白き機体の冷まじき

野村 久

現職の教職員が俳句に親しむと、児童・生徒への広がりが出てくる。また、実作経験は俳句指導に影響大。その意味で、このような大会（芸術祭）に大いに挑戦してほしい。

一句目「石垣高し」で廃校の環境が想像できる。二句目「幾千の紅葉」の把握が大景を示唆。その中の阿弥陀仏の神々しさが浮かぶ。

三句目の季語の斡旋は意欲的。しかし「冷まじ」は、寒々とした秋の終わりを心理的に表現する季語であるので要注意。また、ジェット機の「機」と「機体」は重語的、要工夫。

佳作 返り花何か懺悔をするやうに

山茶花の寂びたる庭を灯しけり

月光に木目浮きたつ廊下かな

土屋八重乃

「竹馬の友」と題する作品。幅の広い作風が感ぜられた。一句目の「返り花」と「懺悔」の取り合わせは類想感がない。「返り花」の季語としての本情把握が的確。二句目、三句目は「光りと色」を意図して調和させた写生句で詩情豊かな作品となった。